少年院出院後の生活状況調査

特定非営利活動法人新公益連盟　少年院分科会

2020年7月

目次

はじめに　十人十色の自立に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

「少年院出院後の生活状況調査」概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

出院者インタビュー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5～34

出院者インタビューを終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

質問項目への回答まとめ表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36～37

本報告書に関する連絡先・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

はじめに　十人十色の自立に向けて

以前、主催したシンポジウムで、かつて少年院で暮らしたことがある当事者の発言にショックを受けたことがある。「軽々しく『支援したい』と言われるのが嫌でした」。確かに、自分自身を振り返ってみても、例えば思春期にはあらゆる人のアドバイスが煙たかったこともあった。平均11ヶ月の期間を外界との接点はほとんどなく少年院で過ごして、出院後すぐに支援の押し売りをされても困るのは、言われてみれば想像は難しくない。
そうはいっても、家庭環境や交友関係を主体的に選べないまま、非行などの道に進んでしまった過去のある若者が、どう少年院に戻ることなく社会に戻っていけたのか。院内での教えは役に立ったのか？　強く影響を受けるような人との出会いがあったのか？　家族の支えはどうだったか？　さまざまな疑問や期待は交錯するものの「パターン」があるのかどうかすら不明だった。

一方で少年院を出て、再び少年院や刑務所に戻ってきてしまう人への調査はかなり頻繁に行われている※[1]※[2]。特に就労状況が再犯に影響することなどは、一定の数字によって明らかにされている。その事実を踏まえた民間レベルの取り組みも、例えば全国就労支援事業者機構や日本財団「職親プロジェクト」など、少しずつとはいえ広がりを見せている。

それでは逆に、少年院を出院して、塀の中に戻らず自立した生活を送っている人の調査も価値があるのではないか。自立に向けて歩んだ道のりの共通点や相違点をあぶりだすことによって見えてくる地平があるのではないか。なかなか関心や同情や支援が集まりづらい課題領域である「再犯防止」も、明確な調査に基づいてアクションに繋げることができれば、自分ごと化や世論喚起ができるのではないか・・・。

そんな想いで立ち上がった今回の少年院出院者調査プロジェクト。
コレクティブインパクトによる社会課題解決を目指す団体である「新公益連盟」に加盟する団体が中心となり立ち上げた少年院分科会。そこに一般社団法人あおい福祉AI研究所からいただいた寄付金を原資にして、本プロジェクトはスタートすることができた。児童虐待や不登校・引きこもりなどを専門分野に活躍している有馬知子さんをインタビューアーとしてお迎えし、丁寧な報告書を起こしていただいた。2020年7月27日の本報告書の公開にあたっては、インタビューにも応じていただいた新井博文さんや陰日向問わずご支援いただいた法務省小山定明さんにご登壇いただくイベントを開催する。以上の皆さんには、心から感謝を申し上げたい。また、今回インタビューに応じてくださった出院当事者の皆さんにも、心から感謝申し上げたい。十人十色の結果ではあったものの、そこに通底する色彩はおぼろげながら見えてきたのではないかと総括している。この報告書を読んでくださった皆さんと一緒に、次なるアクションを検討していきたい。

新公益連盟少年院分科会　吉田雄人（NPO法人なんとかなる共同代表）

---

[1] 法務省による「犯罪白書」が詳しい：「令和元年度　犯罪白書」
http://hakusyo1.moj.go.jp/jp/66/nfm/mokuji.html

[2] 民間の調査では、認定NPO法人育て上げネットによる調査報告書が詳しい：「開かれた少年院実現に向けた少年院の取組み実態に関する調査」
https://ameblo.jp/sodateage-kudo/entry-12541653895.html

「少年院出院後の生活状況調査」概要

実施者：特定非営利活動法人新公益連盟　少年院分科会

目的：少年院出院後、再犯せず社会に留まる当事者の話を通じて、再犯する人としない人との違いを考える。さらに、出院後の自立を難しくしている要因を明確化し、必要な仕組みづくりに活用する。
助成：一般社団法人あおい福祉AI研究所

実施期間：2019年12月～2020年5月（対面9人、オンライン1人）
形式：当事者へのインタビュー（ひとりにつき概ね1時間半～3時間）
人数：10人（男性9人、女性1人）
年齢：20歳～41歳
入院理由：特殊詐欺、薬物使用・所持、集団暴走、危険運転致傷、過失致死　等
対象者：少年院への入院経験があり、成人後に再犯していない人（少年院に複数回入院した人は含まれる）

質問項目
1.基本的な情報（年齢・性別・家庭の状況・生育歴等）
2.入院理由（非行の内容とその背景、逮捕された経緯）
3.入院中の経験のうち、その後の人生で役に立ったこと
4.出院後の生活ぶり（住環境、家族との関係、学歴・職歴等）
5.出院後に苦労したこと、現在困っていること
6.出院後に受け、助けになったサポート、欲しかったサポート
7.再犯せずにいられた「歯止め」は何だと思うか。

新井博文さん（33歳）

（略歴）
1987年生まれ。滋賀県大津市出身。川崎市在住。小6で両親が離婚、父親と暮らし始める。14歳で暴走族に入り、16歳の時に公務執行妨害容疑で逮捕。18歳まで加古川少年院に入院。出院後は電気設備会社に5年勤務し、23歳で国際NGO「ピースボート」の世界一周の旅に参加した。ピースボート職員などをした後、2018年からシェアリングエコノミー協会職員。

「カッコいい」と不良の道へ　いじめと離婚もきっかけに

　新井さんが不良グループへ「吸い寄せられた」きっかけは二つある。小4からお山の大将的なキャラクターが疎まれて、たびたび無視されるなどのいじめに遭ったこと。そして小6で、両親が離婚したことだ。離婚をきっかけに、この年頃に芽生えがちな大人への不信感や反発心が膨らんだという。中1までほとんど友人はいなかったが、中2で久々に意気投合する友人ができた。その友人の兄は、暴走族のメンバーだった。彼らに誘われて「カッコいい」と煙草を吸い、暴走族に入り、カツアゲや盗みなどもするようになった。
　家にも学校にも居場所がないと感じていた新井さんにとって、ルールを守っていればハブられない、同じような子の吹き溜まりである不良グループは、居心地が良かった。中3の時、傷害容疑などで逮捕され、20日ほど少年鑑別所に入った。グループの周りにはつねに警察官の目があり、少年院に入院する仲間も多かった。新井さんは暴走族のリーダー格だったこともあり「いずれ自分の番が来る」という思いはあった。ただ、新井さんは薬物には手を出さなかった。薬物中毒の先輩が金をせびる様子をカッコ悪いと感じ、尊敬できなかったからだ。「先輩にさんざんシンナーを勧められたけれど、殴られても拒否した」そうだ。
　16歳で、小競り合いになった警察官を殴り、公務執行妨害容疑で現行犯逮捕された。「捕まった時は頭に血が上っていたが、後で『やってもうた』と思うくらいで、全く反省はなかった」と振り返る。

カッコ悪い先輩入院者が反面教師に

　加古川学園は、国内最大の敷地を持つ少年院だ。17歳以上の入所者が多く、16歳で入所した新井さんは、すぐにいじめの標的にされた。院内は私語厳禁だが、入浴や掃除などの際、先輩たちに悪口を言われた。新井さんも言い返して口論になり、結局先輩も含めて独居房入り、正座1週間ということもあったという。
　同少年院では、大型建機、危険物取扱などの資格を取った。ただ免許証の顔写真は、あからさまに院生と知れる坊主頭で、これを世間に見せて働く気にはならなかったそうだ。新井さんに仕事の喜びを教えてくれたのは、院生の多くが嫌がる農作業だった。植え付け、水やりといった努力が文字通り「実になる」面白さだ。ナス嫌いだった新井さんだが、自分で育てたナスの味噌汁は「めっちゃおいしかった」と振り返る。
　大人への不信感で凝り固まっていた新井さんにとって、教官たちはきちんと話を聞いてくれる、初めての「信頼できる大人」だった。「人前で話をする時は、相手を意識した方がいい」といった彼らのアドバイスで、コミュニケーション能力も磨かれていった。少年院でのもう一つの収穫は、読書習慣が身に付いたことだ。院内は本しかないからこそ、他の娯楽に逃げずに本と向き合えて、知識の種を仕込めたという。「五体不満足」や「だから、あなたも生き抜いて」などを読み、世の中にはいろんな人がいることも知った。
　一方、新井さんから見ると、先輩入院者は圧倒的に「ダサかった」。更生する気もなく、何もできないのがダサいし、発言もダサい。人としてこうはなりたくないと思ったそうだ。「カッコよさ」を求めて不良の道に入った新井さんにとって、彼らの姿は格好の反面教師になった。

家族の涙と暴走族仲間の死が転機に　仲間5人で「更生しよう」

　父親はほぼ毎月、有休を取って面会に来てくれた。それまでは反抗していたが、滋賀県から兵庫県まで結構な距離を移動してくれて、すまないなと思ったという。「シスコン」を自認する新井さんにとって、6歳下の妹が面会で泣きわめいたことも堪えた。被害者への手紙や反省文も書いたが、正直言って盗んだバイクの持ち主が困ることなどほとんど考えなかった。むしろ身近な人を悲しませてしまったことに、罪の意識を感じたと振り返る。
　そんな時父親から、暴走族仲間が抗争で殺されたと伝えられた。「彼は何も得ないまま死んでしまった」と、新井さんは強いショックを受けた。出院後、彼の報復について仲間と話し合った。「報復するなら相手を殺すしかない。刑務所に入ることになる。内心みんなビビっていた」新井さんは、「自分はそんな人生は歩みたくない」と思ったそうだ。「仕返しで死者が報われるとは思えない。仕事を頑張って金持ちになり、（遺族である）彼のおっちゃん、おばちゃんに『更生したよ』と伝える方が大事なんじゃないか」新井さんは、自分に同意した5人と一緒に、グループを抜けた。

地元にいると再犯してしまう　世界1周の旅へ

　出院後は友人の紹介で、電気設備の会社で働き始めた。親方や先輩の多くは「元やんちゃ」で、家庭的な雰囲気だったし給料も良かった。だが出院して5年ほど経つと、新井さんは「一生地元でこの仕事をするのか」と悩むようになった。ケンカに巻き込まれるなど、いずれ再犯してしまうのではという恐怖心もあった。しかし、職探しをしても中卒の募集はない。「この頃が一番暗い時期だった。出院者である自分の人生に明るい将来はないと、絶望に囚われた」。　追い詰められた新井さんは「何か思い切ったことをしなければ」と考え、書店に向かう。偶然読んだ旅行記に、国際NGO「ピースボート」の「世界一周の船旅」が紹介されていた。「これしかない」。団体に連絡し、船旅のポスター貼りをして割引券をためた。23歳で念願の旅に出る。初の海外旅行だ。「世界は広い。滋賀県だけじゃない。めっちゃ面白い人もいっぱいいる。人生まだまだ全然いけるなと思った」と振り返る。
　帰国後、ピースボートスタッフにならないかと誘われ、わらにもすがる思いで上京した。35～40万円あった給料は当初、15万に減ったが、仕事は楽しく貧乏も気にならなかった。スタッフ同士、共同生活したのも「いい修行」だったという。地球を計4周し、洋上イベントの企画や監修、若者たちの乗船サポートなどに携わった。
　ただ新井さんは、ピースボートは人生を見つめ直す良い機会ではあるが、ある意味、少年院と同じだとも話す。「船旅という『閉鎖空間』ではどんな決意もできる。本当の勝負は、船を降りた後に地に足を付けて行動できるかだ」。
　また新井さんは、ひとまず地元で就職し、5年を乗り切った。昔のつながりを断ち切ろうと、出院直後に故郷を離れることにも、危険は潜んでいると考える。「つながりもない土地で中卒でも見つかる仕事は非常に少ない。知る人のいない土地で孤独になり、結局犯罪がらみの仲間とつながってしまうのではないか」という不安もあったそうだ。

「やりたい事の種」見つける支援が必要

　新井さんは6年間ピースボートに勤務した後カナダに1年滞在し、2018年にシェアリングエコノミー協会へ入職した。職探しに苦労した経験から「すべての人がさまざまな形で社会参加する」という協会の理念に共感したためだ。新井さんは、少年院での資格取得や、出院時の住み込み就職のあっせんも大事だとする一方、本人が将来やりたい事の「種」を見つけるための支援も必要ではないかと指摘する。「入院者は『情報弱者』なので、資格を取るべきだと言われれば盲目的に従う。ただ何のために資格を取るかは、置き去りにされがちだ。

僕自身は、資格よりも教官に向き合ってもらい、農業を通じて働く喜びを知り、読書した経験が、ピースボートへの『種』になった」。
　最近、やんちゃ時代の仲間がふと言ったという。「愛されていると感じる数が少ないと、再犯してしまうのではないか」。新井さんもピースボートや協会などの居場所を見つけ、結婚もして2019年末に第一子を授かった。「愛を感じ続けたから、外にいられた」と考えている。出院者に、住み込みの仕事という太い糸1本しかないと、糸が切れた時行き場がなくなってしまう。趣味の仲間や信頼できる支援者など、愛情を感じられる細いつながりをたくさん持つことが大事ではないかと話していた。

まとめ

不良行為を始めた理由
・いじめと両親の離婚で行き場を失う中、「同じような子の吹き溜まり」である不良仲間に居心地の良さを感じた。

入院中の生活や、役立った支援
・大型建機や危険物取扱の資格を取得したが未活用。農作業を通じて働く喜びを知った。読書習慣を身につけたことが、のちにピースボートを知る「種」になった。

出院後の生活、困りごとなど
・再犯を恐れて地元を離れようとしたが、中卒の求人がなかった。

必要だと思う支援
・将来何をやりたいのか、本人に寄り添い考える支援が必要。資格取得の際も、本人の希望を踏まえて必要な資格を選ぶべき。出院後は、住み込みの職という1本の太い糸だけでなく、数多くの細いつながりを持つための支援が必要。

再犯の歯止め
・暴走族仲間の死に接して「罪を犯さず一生懸命生きよう」と思ったこと。ピースボートの仲間や家族など、複数の居場所を得て「愛情」を感じ続けられたこと。

相川知美さん（仮名・41歳）

（略歴）
東京都世田谷区生まれ。埼玉県在住。建設会社を営む父親と、アルコール依存の母親に放置されて育つ。中学入学後まもなく姉に売春組織へ「売られ」そうになって暴力団とつながり、14歳の時に覚せい剤取締法違反（使用）容疑などで5回再逮捕。愛光女子学園に5カ月入院した。出院後は水商売で働いていたが、現在は専業主婦。

崩壊家庭のお嬢様、外食に飽きて自炊を始める

相川さんは3人姉妹の次女で、父親は建築会社を営んでいた。小学生の頃は経営が順調で、バレエやピアノ、お茶、お花に通うお嬢様だったという。だが母親は「アル中」で飲み歩いて家におらず、父親もゴミ屋敷同然の自宅に寄り付かなかった。「当時は週7日外食。お腹がすいたら寿司か焼肉、すっぽん、ふぐのお店のどれかに自由に行ってご飯を食べた」という。ぜいたくな生活だが、相川さんは時期に飽き、小3くらいから自炊を始めた。
母親は酔って「あんたなんか産まなきゃよかった」「お母さんだって自由が欲しい」とくだを巻き、暴れた。冬に下着姿で外に出されたこともある。父親も、地元の不良が避けて通るほどの「気合の入ったおやじ」だった。しょっちゅう殴られ、6階のベランダから宙吊りにされるなど「めっちゃ怖かった」と振り返る。しかし相川さんは「親とはそういうもの」だと納得していた。母親についても「愛情を感じられたかは微妙だけど、酔って記憶がないのだから仕方ないと思っていた。料理が上達したのも彼女のおかげ」と話す。
バブルが崩壊すると、父親の会社の経営が悪化した。電気もガスも止められて借金取りが来るようになり、閉店間際のスーパーで、割引弁当を買って食べる毎日に。子ども時代、ぜいたくと貧乏の両極端を味わった相川さんは「普通が一番。良い時に貯金し、悪くなっても平均値を保てるようにする」という堅実な価値観を持つようになった。

中1で暴力団事務所に出入りし、薬物中毒に

中学に入学して間もなく、6歳上の姉に「友人の家に行こう」と誘われた。連れて行かれたのは、雀卓のある「変なマンション」。姉と入れ替わるようにこわもての男が出てきて、いきなり売春の話を始めた。整った顔立ちの相川さんは、実年齢より上に見られることも多かった。「『いや、12歳なんで』と生徒手帳を見せたら、さすがに相手も驚いていた」という。男はやくざの親分で、姉に2万円渡して「可愛い子を連れてこい」と命じたと後に知った。売春は免れたが、男は「18歳になるまでお前を育てる」と宣言した。相川さんは、「カラオケにでも行ってこい」と渡される数千円の小遣い目当てに、組事務所に出入りするようになる。
勧められて薬物を覚え、渋谷や池袋でチーマーたちと付き合った。年齢をごまかして、スナックでも働き始めた。「地元だと親の知り合いなどの目もある。でも『街』に居場所が出来てしまうと、自宅に帰る必要もなくなり、歯止めが効かなくなる」。当時、覚せい剤は「スピード」「S」などと呼ばれ、若者の間で気軽に使われていた。相川さんは、組織が薬物を保管していたマンションで寝泊まりし「シャベルで掘るほど」あった覚せい剤を常用した。1週間の大半を、クスリの力で起きっぱなしで過ごし、2日くらい死んだように眠る。「完全なシャブ中」だった。道路際の団地の窓には、人がずらりと無言で並んだ。幻覚症状だ。並木も電信柱も人に見えた。「通り過ぎると木に戻るので『やっぱり幻覚だ』と確認していた。幻覚と現実の区別がつかなくなっていたら、多分人を殺していた」。一方、組織の内偵捜査に入っていた警察は、中学生の相川さんをマークし、行きつけのカラオケボックスなどに現れるようになった。半年ほど逃げ回ったが、中2のクリスマスイブに自宅で身柄を拘束された。

「家庭環境が非行の原因」には違和感

相川さんは覚せい剤や大麻の使用・所持などで再逮捕を繰り返し、7カ月ほど鑑別所と警察署を行き来した。末端価格で数千万円相当の覚せい剤を所持していたため、誰もが長期入院を予想していた。しかし警察の「本命」が暴力団だったこと、両親や中学の教師が嘆願書を出したことなどから「奇跡的に」愛光女子学園に6カ月の短期入院に決まった。

ただ相川さん自身は、家裁の調査官や警察官が、非行の原因を「家庭環境」だと指摘したことが「しっくりこない」と語る。「私自身が善悪を分かった上でしていたことだし、遊ぶのが楽しくてどんどんエスカレートしただけだった」。親も、娘を憎んでいたわけではない。特に母親は逮捕後、娘会いたさにさまざまな騒ぎを引き起こした。警察署で「接見」禁止と言われて「娘はせっけんも使えないのか、どうやって入浴するんだ」と受付で大騒ぎし、音を上げた刑事に面会を許された。入院中は、近親者の面会は毎月1回と決められていたが、父親や姉妹の「付き添い」として月に3度も現れた。

取り調べ中、普段は朝起きられず料理もしない母親が弁当を作り、お昼時を狙って警察署へ通ってきた。警察官が仕方なく、弁当を食べる間だけ母娘を面会させてくれたからだ。「娘への罪悪感や、美味しいものを食べさせたいという親心ではなく、単に自分が会いたいだけ。でもその時、親も少しは変われるものなんだなと、許せる部分もできた」という。「両親は本当に『くそったれ』なんですよ」と繰り返す相川さんだが、現在、彼らとの仲は良好だ。親を恨んでも、前に進めずに損するのは自分。自分のしたことを親のせいにしなかったからこそ、再犯しないでいられたとも感じるとのことだ。

「穏やかだが、マニュアル通り」の少年院

女子少年院は売春で入った院生が下に見られるなど、独特の上下関係が存在した。しかし男子少年院のようなケンカは少なく「穏やかに時間が流れた」という。相川さんは一定期間、外界と遮断されたことで「普通だと思っていた世界や、幻覚を見ていた自分がいかに異常だったかに気づけた」と振り返る。「あの時自分を見つめ直していなかったら、今ごろは薬物中毒で死んでいたかもしれない」。だが教官たちは、きれい事をマニュアル通り話しているとしか思えなかった。毎日のように「お前たちは罪を償っているのではなく、全寮制の学校にいるようなものだ」と言われたが「罪の軽重で入院期間が決まり、作業もある。実態は刑務所の未成年版じゃないか」と、反発するだけだった。

進級面談のたびに「やりたい事」を聞かれるのも苦痛だった。口先では「この経験を糧に頑張りたい」などと答えたが、本当は「自由になりたい」「出たら、中毒にならない程度にクスリをやろう」という考えしか浮かばなかった。院生同士は出所後に会うことを禁じられているが、相川さんは「ほとんどの子はこっそり会う。むしろ少年院が同窓会を開くなど、堂々と会えるようにしては」と提案する。「再犯する最大の原因は、元の仲間に戻ってしまうこと。少年院の仲間と新しいつながりを作り、頑張る姿を見せ合うことはプラスの効果をもたらすのではないか」という。

18歳で出産、薬への執着が消えた。

相川さんは出院後、高校を中退し、16歳で家を出て水商売に就いた。暴力団や昔の仲間との関係を断ってはいたが、当時はまだ「もしクスリを勧められたらやっていた」と振り返る。

目の前にクスリがあっても、絶対手を出さないと思えたのは、18歳で出産してからだ。幼い頃から「まともな家庭を築きたい」という思いが強く、産むことに迷いはなかった。子育てこそ、自分のやるべきことだという気持ちも芽生えた。

熱心な保護司との出会いも、相川さんを支えた。50歳前後の女性で「会うとアサリやわ

かめを持たせてくれて、いわゆる『お母さん』って、こういう人かも」と思えたそう。働き始めてしばらく後、相川さんは元恋人のストーカー被害に遭った。警察に訴え出たが、前歴を知った警察官は逆に「お前が尿検査しろ」と言ったという。この女性保護司に助けを求めると、すでに担当を外れていたのに朝4時にすっ飛んで来て、検査を拒否し、相川さんを連れ帰ってくれた。
「親ですら娘の更生を疑っていたのに、私を信じて助けてくれる他人がいた。当時はさほど意識していなかったけれど『再犯したら、この人を裏切ってしまう』という気持ちは、どこかにあった」と振り返る。
　相川さんは、車のブレーキランプ切れで職務質問された時も、車内を3時間にわたって捜索されたという。少年院では「前科にならない」ことばかり強調されたが「実際には薬物使用の前歴は付いて回る。外に出たら困る局面もあると、きちんと伝えるべきだ」とも話す。また現在、多くの子どもを育てる母として「入院者に気づきを得てほしいなら、まずは先生が、子どもたちの『本当の姿』に気づいてあげて」と要望する。「どんな子も内側に良い面を持っている。悪い所ばかり叱るのではなく『あなたにはこんな良い面があるよね』と認めた上で、改めるべき点を指摘した方が、子どもも受け入れやすい」と語った。

まとめ

不良行為を始めた理由
・姉に暴力団関係者に引き合わされ、組事務所に出入りするうちに薬物中毒に。遊ぶのが楽しくて渋谷のチーマーらと付き合うようになる。

入所中に役立った支援
・一定期間外界と遮断され、自分の行為の異常さを認識する時間ができたこと。教官の指導で役立ったことは「正直、何もない」

出所後に困ったこと
・警察に関わるたびに、前歴を照会され薬物使用を疑われた。

必要だと思う支援
・自分を信じ、困った時に助けてくれる人の存在。血縁のない第三者でも構わない。出院者が堂々と再会する場を作り、頑張る姿を見せ合うことも必要ではないか。

再犯の歯止め
・自分のしたことを、両親や家庭環境のせいにしなかったことと、子どもの存在。

沢村洋さん（仮名・20歳）　リフォーム会社勤務

（略歴）
1999年生まれ。静岡県出身。中学時代から家出を繰り返し、中3の時、集団暴走と暴行罪で茨城県の水府学院へ1年半入院。出所後は静岡市の更生保護施設に入り、飲食業などに就く。約1年後に再び暴走行為で逮捕され1年半、宮城県の東北少年院へ。再び更生保護施設を経てNPO法人「クラージュ」の寮に入り、望月さん（後出）と同じリフォーム会社に勤務している。

打ち込めるものが何もない　家出繰り返し集団暴走

「自分は打ち込めるものが何もなくて、小学校高学年からちょくちょく悪いことをするようになった」と、沢村さんは振り返る。一つ上の兄の友人たちに可愛がられ、年上とばかり付き合った。彼らに誘われてバイクにも乗るようになった。「勉強にはついていけないし、中学は遊び放題だった」という。親は厳しく、すぐ手が飛んで来た。だが親も一時期暴走族に入っており、叱られても「お前もやっていたくせに」としか思えなかった。

中学に入ると暴走族に入って友人宅を泊まり歩き、ろくに帰宅しなくなった。中3の時、暴走行為で30人ほどの仲間とともに一斉逮捕され、1年半水府学院に入った。水府学院は午前中、陶芸などの職業指導、午後は学習や運動といったカリキュラムが組まれている。沢村さんは漢字検定3級や数学検定5級を取り、高校生レベルの数学も学んだ。だが「計算もスマホがあるし、勉強は今、特に役に立ってないですね。漢字を読めるようになったくらいかな」と話す。自分の意思で、身を入れて取り組んだことはほとんどなかった。このため水府学院には「ひますぎた」という印象しかない。ただこの時に訓練されたおかげで、沢村さんは今も非常に達筆だ。「反省文も成績に響くんで、反省したふりをしてうわべだけは書きました。出る時は『次は何をしてやろうか』くらい思っていましたよ」と語る。

教官たちに「自分のことを話せ」と言われて過去を話しても「悪い友達から離れればいい」「お前の気持ち次第じゃないか」と、ありきたりな言葉しか返ってこなかった。沢村さんは「実は聴く気もないのに、仕事だから聴いてるんだろ？俺のことを知りもしないくせに、聞こうとするな」と、心の中で反抗した。教官の胸倉をつかんで1度、椅子を蹴って1度、懲罰房にも入った。

大好きな教官との出会い　保護施設は「社会の少年院」

そんな中、一人だけ大好きな教官ができた。彼に呼ばれて職員室に行くと「人生つらかったんだろう」と沢村さんの思いをズバズバと言い当てた。「なんで分かるの？」と気が緩み、職員室で号泣した。「この人なら分かってくれるかも」と思ったそうだ。

この教官は部署を異動になっても、毎日沢村さんの寮を訪れ、「お前の人生がもったいないぞ」などと怒ったり、励ましたりしてくれた。沢村さんも出院が近づくと、無理を言ってこの教官の寮に移してもらい、毎晩将来について相談した。

親には月に一度、手紙を「書かされた」が、返事は一切来なかった。出院後の身元引受もなく、沢村さんは地元から離れた、静岡市の更生保護施設へ入所した。飲食店スタッフの仕事も始めた。だが保護施設は「社会の中の少年院みたいな場所」だった。午後10時が門限で、給料も全額預けて毎日1000円ずつもらうルールだった。買い物の時は「○○が必要」と理由を話してお金を貰い、領収書を見せる。早朝から夜まで働き、施設では寝るだけの日々。だが服を買いたいし、夜遊びもしたい。そこで深夜、2階の窓から飛び降りて遊びに行き、朝は壁を登って部屋に帰った。「防犯カメラでバレちゃうんですけどね」と話してくれた。

現金を隠し持つため、実際より少ない給料明細をPCで捏造し、給料を紛失したと嘘を言うこともあった。最終的には住み込みの土木会社に転職し、施設を出た。出院から1年後、

沢村さんは懐かしさもあって、つい帰省してしまう。「『1年経ったし大丈夫だろう、みんな変わっただろう』という根拠のない考えで、つい昔の仲間に会った。バイクに乗りたいとは思っていなかったが、結局誘われてしまった」という。そして前回と同じように、集団暴走に加わり大量逮捕に遭う。この時ばかりは「（水府で好きだった）先生に申し訳ない」と思い、電話で謝罪した。教官は「まだ20歳になっていない。しっかりやれ」と言ってくれた。「今もたまに、あの時先生と約束したし頑張ろう」と思うそうだ。

人生変えた試験勉強　ギリギリでクラージュにたどり着く

沢村さんは拘留中にIQテストを受け、資格の専門学校のような東北少年院に1年半、入院した。「東北での勉強は人生を変えた」と沢村さんは言う。高卒認定資格のほか、給排水設備の国家資格を15，6種類取得した。「一つ試験が終わると、次の資格の勉強に追われた。過去落ちた人はいないと言われた試験に1点差くらいで落ちて悔しくて、めちゃめちゃ勉強したこともある」と振り返った。教官に教えてもらって勉強し、理解することの楽しみを、初めて味わった。ただせっかく取った資格だが「仕事にしようとは思わない」とも話す。現場仕事が性に合わないし、賃金も沢村さんにとっては不満だからだ。

東北からの出院後も両親の身元引き受けはなく、更生保護施設に入ってから、住み込みの仕事を得た。ただ当時の恋人にストーカーまがいの行為を受け、勤務先に乗り込まれるなどして職場にいられなくなってしまった。退職すれば、寮に住むこともできなくなる。困った沢村さんは、東北少年院で一度勧められた協力雇用主の建設会社に連絡を取った。ここがだめなら地元に帰るしかないというギリギリの場面だ。社長は「来なよ」と言ってくれた。この人が、NPO法人クラージュの専務理事だ。沢村さんもクラージュの寮に入り、望月優矢さん（後出）と同じリフォーム会社の営業社員として働き始めた。

職場の同僚でケンカを止め合う　地元は「歯止めなく怖い」

「こんな会社は他にない。辞めるつもりはありません」と、沢村さんは断言する。社員は全員20代の出院者で、みんな同年代で、話が合って面白いという。営業社員は3人一組で、古いマンションなどに飛び込み営業を掛ける。やる時はやるが、やらない時はとことんやらない方針で、ノルマは常に達成する一方、一日中釣りやパチンコに興じる日もある。飛び込み営業という性格上、訪問先の住民から怒られたり殴られたりすることもあるという。ムカッと来る時もあるが、「ここでやり返したらダメだ」と、我慢するようになった。「社会で職場のみんなと楽しくワイワイやっていた方がいいじゃないか。少年院のような生活は、もう嫌だ」という思いからだ。

20歳になったばかりの沢村さんだが「この年になると、悪い事をしようと言う気にはならない。町でオラオラ粋がってる奴もたまに見るけど『かわいいな』くらいしか思わなくなった」そうだ。だが心配なのは、酒に酔うと気が短くなり、売られたケンカを買おうとしてしまうことだという。「『こんな奴になめられるくらいなら』と、タガが外れかけるんです」。そんな時、止めてくれるのも同僚たちだ。逆に沢村さんが、仲間のケンカを止めることもある。だからこそ、止めてくれる人のいない地元に帰るのは怖いという。LINEで連絡を取っている地元の友人はたった1人だ。「地元で酔って切れたら何をしでかすか分からない。歯止めが利かなくなるのが怖い」と話す。

「更生」簡単に言わないで　遊びたい時もある

教官は決まって入院者に「更生しろ」「健全な生活を送れ」と言う。だが沢村さんは「自分が先生だったら『警察の世話にならない程度に遊びな』と言うけどな」と話した。少年院出院者は、未成年か20歳そこそこだ。同年代の若者も時には盛り場に出て、羽目を外して

いる。出院者だけに遊ぶなと言うのも無理な話だ。「更生という言葉を、簡単に使わないでほしい。入院中にいろんなことを我慢しているのに、出た直後からストイックに、健全に頑張れと言われても無理だ」と語る。

出院から2年、沢村さんはまだ自分を「ちゃらんぽらんな状態」だと思っている。1回目の出院後、一時行き来が復活した親との関係は、2回目の逮捕で再び途絶えた。東北から出院する時、両親は保護観察官に「実家に来ても同じことの繰り返しだ。しっかりしてから来いと伝えてほしい」と話したという。「親に『もうやりません』と言っても、まだ信じてもらえないだろう。結婚の挨拶とか、人生の節目で会いに行くつもりです」と話した。

まとめ

不良行為を始めた理由
・打ち込めるものがなく、小学校高学年から悪さをするように。兄の友人に誘われて暴走族へ。親も元暴走族で、怒られても「お前もやっていたくせに」と思うだけだった。

入院中に役立った支援
・水府学園で、熱心に相談に乗ってくれた教官を今も慕っている。東北少年院での資格取得を通じて、勉強することの喜びを知った。ただ取った資格は未活用。「悪い友達から離れればいい」といった教官の正論も心に響かなかった。

出院後に困ったこと
・更生保護施設の制約の多さ。住み込みの職場では、失職と同時に住まいを失うリスクにさらされた。今も酔うと歯止めが効かず、暴力を振るおうとしてしまう。

必要だと思う支援
・闇雲に「更生」を目指すのではなく、ほどほどに遊ぶことも受け入れながら自活させる支援。

再犯の歯止め
・NPO法人クラージュの新しい仲間。彼らと楽しくすごしたい、少年院の生活はもう嫌だという思い。

高木直人さん（仮名・24歳）

（略歴）
1995年生まれ。3歳で父母が離婚し、父方の祖父母の家で育つ。11歳で実父・義母と同居するが義母に虐待を受け、児童養護施設や自立支援施設などを転々とした。家を出て「野良」生活をしていた17歳の時、生活費を稼ぐため本を大量に万引きして窃盗容疑で逮捕され、千葉県の市原学園に約半年入院。19歳でも同様の経緯で多摩少年院に1年8カ月入院。出院後、更生保護施設へ入り就職したが病気で退職。生活保護を受けて一人暮らしをしている。

義母から暴力受け施設を転々、17歳で「野良」に

高木さんが3歳の時、父母は離婚した。実母の記憶はないという。11歳で、父親と再婚相手の住む家に引き取られた。だが義母から電気スタンドで頭を殴られるなどの暴力を受けたこともあり、あまり家には寄り付かなかった。「義母からは、なぜ暴力を振るわれたのか分からない。ストレスがたまってたんじゃないですか」と語る。義母の振り回したカギが、高木さんの肩に刺さったこともある。父親は、高木さんには関心のない様子だった。中学からは、自宅と児童相談所の一時保護所、児童養護施設を行ったり来たりした。それまでの生活が過酷すぎたためか、施設では「飯もうまかったし、特に窮屈ではなかった」と、淡々と過ごしている。不良仲間と暴走行為をしたこともあるし、万引きして逮捕されたこともあるが「あまり授業にも出ず、交友関係も広く浅くで、親しい友人は少なかった」という。高校入学後、1人暮らしを始めたがほどなく中退。親しかった近所の住民が偶然、虐待の傷を見て「どうしたの」と聞いてきたので「義母に刺された」と打ち明けたら、10カ月ほど家に居候させてくれたこともあった。

18歳で「野良」生活に　本を大量に万引きして逮捕

18歳で約3カ月間、住む場所のない「野良」生活を送った。友人から金を借りてネットカフェに泊まったり、24時間営業のゲームセンターやファストフード店、パチンコ屋の休憩所で寝たりした。洗濯はコインランドリーを使った。一番困ったのは夏場の風呂。寒さは屋内に入ればしのげるけれど暑さはどうしようもないので、銭湯代がかさんで困ったそうだ。
生活費のために本を大量に万引きし、友人に頼んで転売してもらった。書店に買い物カゴを持ち込み、70～80冊もの本を持ち出す。長編小説や漫画を全巻盗むと、セット価格として数万円で売れることもあった。「知らん顔して店を出ると、何も言わないことが多かった」という。同じ店で20回ほど、万引きを繰り返したところで逮捕された。店の外で警備員に肩を叩かれ「分かってますね」と言われたという。高木さんはこの時、捕まろうが捕まるまいがどうでもよかった。だからこそ、店員に見張られていることに気付きながら、店を変えるという発想もなかった。「あー捕まったか、という感じで、特に何も感じなかった。捕まらなかったらそのお金で遊ぶだけだし、捕まったら自分がどうなるかということにも、関心はなかった」そうだ。ただ、何も知らずに本を売ってくれた友人に、迷惑を掛けたくないとだけ思ったという。

「半年で出られる」訓練に身を入れず、出院後は野良に逆戻り

高木さんが過ごした市原学園は、入院期間が最長6カ月と定められ、軽犯罪・初犯の若年者が多い。3週間ほどの行動訓練をこなし2級に上がると「職業指導」として陶芸などに取り組む。審査会を経て1級に上がると出院準備に入り、社会貢献活動などで外出の機会もある。

高木さんはもともと読書家で、余暇はライトノベルなどの本を読んだり、テレビを見たりして過ごした。「これといって苦痛はなかった。タバコ吸いたい」くらいだったそうだ。ただ、半年待てば必ず出られると考え、訓練などに本気で取り組む気はなかったという。このため「入院が無駄だったとも思わないが、役立ったこともあまりない」と振り返る。担当教官には好感を持ったが「やりたい事に挑戦してみろ」と言われても、やりたいことがなかった。審査会でも社会での抱負などを「適当にしゃべった」だけだった。

出院後は、埼玉県内の建設会社に型枠工として住み込み就職した。出院した時は「住むところが見つかってありがたい」と思ったが、寮費や携帯電話代などを差し引くと、手元に残るのは毎月数万円。雨が降ったら作業がなくなり、日給はもらえない。家電などを揃えて自立の費用を準備するには、ゆうに5，6年は掛かってしまうとのことだ。「少年院と違って何をしても評価されないのが、一番きつかった」とも話す。「入院中は、院生同士で励まし合ったし教官も努力を認めてくれた。だが勤め先には親しい友人もなく、無口な職人たちが褒めてくれるわけでもない。孤独なまま頑張れと言われても心が折れてしまう」と話す。落下事故で足を痛めて現場から足が遠のき、約3カ月で退職。「野良」に逆戻りした。メンキャバの下働きなどもしてみたが、数日で辞めた。まもなく再び本を万引きして逮捕され、多摩少年院に送られた。

問題児にとことん向き合った教官　NPOとの出会いが歯止めに

多摩時代は「まあ問題児だった」と振り返る。教官に暴言を吐いて2回、懲罰のため単独寮に入れられた。1年の予定だった入院生活は、1年8カ月に及んだ。「早く出院したいと言う気持ちも、出てからの希望もなかったので、課業も訓練もやる気はなかった」と話す。PC の訓練は、CADを使って遊んでいただけで、フォークリフト運転者の資格を取ったが、将来資格を生かそうという展望はなかった。高卒認定資格に落ちても悔しいとさえ思わなかった。

教官たちはそんな高木さんを「お前はできるんだから全力でやれ」と厳しく叱った。行動訓練でも1人だけ、何度も昇給を見送られた。「やっている風を装って流してたのがバレたんだと思う」と振り返る。教官の1人は「25歳まで（入院を）延ばせるんだぞ」と言う。高木さんが「いいんじゃないですか」と応じると、彼は「分かった。3年でも4年でも俺はとことん付き合うよ」と答えた。毎週2～3時間にわたってこの教官と面談するうちに、高木さんに「生活を立て直して、出院しよう」という気持ちが芽生えた。ボランティアの篤志面接員が「外に出たらこれをやってみないか」などと、出院後に関する具体的な提案をしてくれたのも、気持ちを前向きにしてくれた。教官が出院半年前「お前は出院後のサポートがないと不安だ」と紹介してくれたのが、無職の若者らを支援するNPO法人「育て上げネット」の井村良英さんだ。井村さんとは現在も月に1度ほど会い、食事やゲームを楽しんでいる。出院から5年間、つかず離れずそばにいる井村さんの存在は大きいという。「1、2カ月に一度、一緒に遊んでくれてリラックスできるし、相談すれば『こんな支援があるけど、どう？』と選択肢を示してくれる。再犯しないでいられるのは、井村さんや周りの友人たちとの人間関係があるからだと思う」と話した。

出院後も困りごと山積　体壊し生活保護に

　出院後は更生保護施設に入った。まず困ったのは身分証明書がなく、携帯電話の契約もできなかったことだ。当面、施設貸与のプリペイド携帯でしのぎ、窓口ですぐ発行してもらえる健康保険証を作った。しかし健康保険料が払えず返還すると「病院にも行けない」状態に。理容院に住み込みで勤めたが、風邪をこじらせて退職した。うつ病の診断もあり、生活保護を受けた。「生保がなかったら野良に戻るか、ホームレスになっていた」と話す。
　回復したら再度就職したいが、高木さんには「したい仕事も、やりたいこともない」。「出院する時には、学校に通って資格を取りたい、などの思いもあったけれど、ろくに社会にいなかった人間が1人で働き、お金を貯めるのは容易なことじゃない。家族がいれば別かもしれないが、院内での計画を外に出て実行できる人は少ないんじゃないですか」という。「彼女を作って安定した生活を送れ」と話す教官もいた。しかし、そんな余裕ねえよ、彼女作る前に自分が死ぬよと思ったそうだ。
　ただ高木さんは、犯罪を繰り返そうとは思わなくなったという。「再犯したら、次に入るのは刑務所。少年院と違って（前科がつくなど）マイナスが大きすぎて、リスクを冒そうと思えない」。だが一番大きな歯止めは、住まいを得たことだ。「万引きしたのはお金がないと飯が食えないし、眠る場所もなかったから。今は家でYouTube見てスマホで小説読んで、たまに井村さんや友達と会える。パチンコ屋やゲーセンに入る金を作らなくてすんで、家でのんびりできるのはありがたいですね」と話した。

まとめ

不良行為を始めた理由
・親の離婚や義母の虐待などで居場所を失ったこと。特に18歳で「野良」生活を送るようになってからは、パチンコ屋やゲームセンターで過ごす金を得るため、万引きを繰り返した。

入院中に役立った支援
・本気で向き合ってくれた教官との対話を通じて、生活を立て直そうと思うように。「育て上げネット」を紹介され、出院後も継続的なサポートを受けられた。

出院後に困ったこと
・身分証明書がなく、最初は携帯電話も契約できなかった。住み込みの職を得たが、体を壊すなどして働けなくなり、住まいと職を一度に失った。職場に親しい人が周囲におらず、孤独のため仕事に踏みとどまれなかった。

必要だと思う支援
・出所後、定期的に会って話をする伴走支援。困りごとを相談した時に、支援の選択肢を示してもらいたい。

再犯の歯止め
・相談相手になってくれる育て上げネットの職員や友人との人間関係。何よりも住まいを確保し「犯罪行為をしないと寝るところもない」状態から脱したこと。

杉田良彦さん（仮名・30代）　介護施設経営

（略歴）
中学までは部活動に打ち込むが、高1で退部したことをきっかけに不良行為がエスカレートする。高校卒業後に逮捕され、18歳から1年1カ月、多摩少年院に入院。出院後、土木作業の仕事などで学費を貯めて専門学校に入り、医療関係の資格を取得。病院勤務の後、2015年に関東地方で介護関連のビジネスを立ち上げ、現在複数の介護施設を経営している。

部活をやめて歯止めを失う　高卒で少年院へ

小学校時代から運動に打ち込んでいた杉田さんは、中学では部活の部長を務め、市の選抜メンバーにも選ばれた。一方で「ふざけること、楽しい事が好き」で、中学時代も時折友人と煙草を吸ったり、盗んだバイクに乗ったりしていた。それでも「バイクを盗んだのがばれたら退部になるし、たばこを吸いすぎたら体力が衰え、選手になれない」などと考え、深入りはしなかった。

しかし高1での退部をきっかけに、生活が暗転する。部活の顧問に誘われて進学した高校だったが、入学直後に肝心の顧問が、学校を辞めてしまったのだ。新しい顧問は全く違うスポーツの元選手だった。「素人に『あれをしろ、これをしろ』と言われても説得力がない。彼に教わらなくても、自力で選手になれると思ってしまった」。しかし高校生が1人でスポーツを極めるのは難しい。生活の軸を失って遊びの楽しさに負け「夜の街に出て何百回と補導され、窃盗などで捕まったこともあった」という。

高校卒業後、逮捕され18歳で多摩少年院に入院。当時は「こんちくしょう。適当にやって出てやろう」と思っていたという。最初は決められたスケジュールに流されるまま行動していただけで、裏ではこそこそ私語するなど、ルール破りもした。

人生変えた教官との出会い　「社長になりたい」夢を評価

杉田さんを変えたのは、担当教官との出会いだ。教官はまず杉田さんに「ロールレタリングをしてみたら」と勧めた。受け取り人を想定し、出さない手紙を書くことで、自分を見つめなおす一種のセルフカウンセリングだ。杉田さんは、被害者の立場で手紙を書くことにした。実際にどう考えているのか知りたくて、被害者の著書なども読むようになった。次第に杉田さんは「社会でも少年院でも同じように人をだまし、隠れてこそこそ悪事を働いている自分」に嫌気がさし、変わろうと努力するようになる。自ら規則を守るだけでなく、ルールを破った人を注意（※1）もした。この結果優良院生として、出院が1カ月早まることになった。ただ杉田さんの行動を「点数稼ぎだ」と快く思わない院生たちは、過去の規則違反を教官に言いつけた。

そんなある日、杉田さんがPCを操作していると、担当教官が来て杉田さんのPCに、おもむろに何事かを入力して立ち去った。画面には「言いたいことがあるなら、きちんと言いなさい」「バレてるな」。杉田さんは職員室に行き、正直に告白した。みんなの前で謝罪させられ、出院は逆に1カ月延びた。「今は、かえってそれで良かったと思います」と話す。教官は、親に謝罪や反省の姿勢を見せない杉田さんを怒りもした。「お前は一体、何をやっているんだ。親御さんは世間話が聞きたくて、わざわざこんな遠くまで来てくれたわけじゃないんだぞ」。杉田さんは、次の面談で両親に謝罪した。後日両親から「謝ってくれて嬉しかった」という手紙を受け取ったという。

出院が近づくと、教官は杉田さんに何になりたいかたずねた。杉田さんは答えた。「社長になりたい」。笑われると思ったが、教官は「いい夢だ」と言ってくれた。どんな事業を興すかまでは考えていなかった杉田さんに「好きなことを書き出してみたら」と提案した。その中から、実現可能性が高そうな職種を選ぶのだ。好きな服飾の仕事を探したが、デザイナーは才能が必要で、販売員は給料が低い。残ったのが運動と「人と話すこと」だった。職業を調べると、リハビリなどを通じてスポーツに関われる資格を見つけ、これを目指そうと考えた。

居酒屋バイトと通学を両立　資格取得しデイサービス開業

出院後、実家に帰った杉田さんは、資格を取るため専門学校への進学を目指した。「親に迷惑はかけられない」と、1年間土木作業員をして学費を貯め、それでも足りずに奨学金を取って、4年間学校に通った。「昼間の授業時間を終えて午後6時ぐらいから居酒屋でアルバイト。早朝に始発で帰って仮眠してから学校へ行った」。お金はなく、生活は苦しかった。かつての仲間たちは相変わらず遊んでおり、不良行為にも誘われたが加わらなかった。「高価なものを身につけている友人をうらやましく思うこともあったけれど『再犯したら、今までの頑張りが水の泡だ。10年後には彼らの先を行くんだ』と思って我慢した」と話す。

「やる」と決めたことを最後までやり切る力がついたのは、小学生の頃から続けていたスポーツのおかげもあるという。最初は自信がなく、試合に出ても腰が引けていたが、努力したら6年生でレギュラーになれた。中学での厳しい練習を乗り切ったからこそ「あの練習に比べれば、まだまだ頑張れる」と思えるようになった。

無事に資格を取り、2年ほど病院で勤務した。杉田さんは、高齢の入院患者が回復して退院しても、自宅の段差などで転び「数日後、再び同じ病室のベッドに寝ている」ケースが多いことに気付く。「家の近所にリハビリなどができる施設があれば、お年寄りも安心して生活できるのではないか」。民間企業の介護施設立ち上げに関わった後、デイサービスなどの会社を興した。未成年で罪を犯した少年院出院者は、報道に名前が出ることもなく、本人が明かさない限り、前歴を知られることはない。杉田さんの場合も、資格取得や起業時の銀行融資などに、支障は出なかったという。

「メリットしかなかった」入院経験

「入院経験は、自分にとってメリットしかなかった。入院していなかったら、刑務所に入っていたかもしれない」と、杉田さんは語る。担当教官は、出院後も折に触れて相談する「人生のメンター」であり、今でも年に一度は食事を共にする。思春期に入って会話がなくなった両親の気持ちに、手紙を通じて気付けたのも良い経験だった。そして何より、経営者になるという人生の進路を決められた。「苦労して資格を取ってからは、再犯して剥奪されたくないと思うようになり、開業後は『社長なのに、犯罪者として報道されるようなことはしたくない』と考えるようになった」という。同時に逮捕された友人も、結婚して家族ができたり、勤め先で責任ある立場に就いたりして「やるべきことが決まったら、ガラッと変わった」と話す。

一方、進路が明確でないまま出院した人は、努力する目的を持てず、悪い誘いに乗りがちだったという。杉田さんは「入院中の『やりたい事探し』の支援のほか、出院後も相談に応じるメンターを用意すべき。保護司の制度をブラッシュアップするのも一案では」と提案す

る。少年院では、建設作業系の資格取得コースが多数用意されている。杉田さんも危険物取扱やフォークリフト運転などの免許を取ったが「とりあえず現場系の資格を取らせるのではなく、漠然とでも将来の方向性を定め、それを踏まえて資格を取るべきだ」と話す。ただPCのスキルは、専門学校時代から一貫して役立っているという。

　また杉田さんは、入院している間に、再犯しないための実践的な対処法を教える必要もあると訴える。「ただ『悪い友人に近づくな』と言うだけでは、再犯リスクは減らない。出院者をアドバイザーとして定期的に招くなどして、外に出て昔の仲間に悪事に誘われたらどう逃げるかなどを、具体的に話してもらうのが効果的ではないか」。

　インタビューに応じてくれた何人かの出院者と同様、杉田さんも今後、出院者支援を事業化できないかと考えている。「ボランティア主体の支援では、本業の片手間になってしまうし支援者の負担も大きい。ビジネスとして持続可能で、対価や雇用に結びつく支援の在り方を考えたい」と話していた。

まとめ

不良行為を始めた理由
・打ち込んでいた部活動をやめたこと。遊びの楽しさに負けて、喫煙や窃盗などの違法行為をエスカレートさせた。

入院中に役立った支援
・担当教官との出会い。被害者の気持ちを想像するロールレタリングなどを勧めてくれたほか、「社長になりたい」という夢を、現在の職業に結びつけるアドバイスもしてくれた。その後の人生における相談相手でもある。

出院後に困ったこと
・専門学校入学を目指し、1年間現場労働で学費を貯め奨学金も得るなど苦労を重ねた。在学中も夜はアルバイトをして学費を稼いでいたため肉体的負担は大きかった。

必要だと思う支援
・やりたい事を探し、将来の進路をある程度明確にする支援と、出院後に相談に応じるメンター。悪い友人に誘われた時の逃げ方など、再犯防止の具体的な対処法を入所中に教えておくこと。

再犯の歯止め
・苦労して進学した自分の頑張りや、取得した資格が「再犯したら水の泡になってしまう」という思い。

（※1）
一部の少年院には、院生同士がお互いの至らない点やルール違反などを、大きな声で注意し合う「助言」という制度がある。ただ出院者からは、悪用されるといじめにつながりかねないという批判も出ている。

望月優矢さん（24歳）リフォーム会社営業

（略歴）
1996年生まれ。山梨県出身。3歳で両親が離婚し、親戚を転々とした後小3から静岡県内の児童養護施設で育つ。高校中退後、窃盗や傷害、無免許運転、集団暴走などの罪で15～18歳の間に2回入院。その後窃盗団を組織し19歳で久里浜少年院に1年入院した。20歳で出院後は、触法少年らの自立を支援するNPO法人「クラージュ」に身元引受けされ、寮生活をしながらリフォーム会社で勤務している。

親戚から虐待受け施設で過ごす　ケンカや窃盗に明け暮れ少年院へ

望月さんは3歳で両親が離婚し、最初は父親、その後母親に引き取られた。母親はたびたび失踪し、その間は祖母や叔母宅に預けられた。預け先での記憶はあまりないという。ただ曾祖母から後に「優矢が遊びに来ると、体中あざだらけだった」と聞かされており、祖母からも叔母からも、頻繁に虐待を受けていた可能性が高い。望月さんも「叔母宅で、灯油を頭からかけられて火を付けられそうになったり、真冬にベランダに出されたり」といった「インパクトの強い暴力」は覚えている。
一時は見かねた父親に引き取られたが、小3からは中学卒業までは、静岡県内の児童養護施設で過ごした。「施設でも学校でも、ケンカばかりしていた。やられるよりやる方で、いきなり手を出すこともあった」と話す。少年院に入るまで、勉強できる環境に身を置いたことはなく「自分はバカだと思っていた」。中学入学後も、万引きとけんかに明け暮れた。高校に入ったが、喫煙がばれてたびたび自宅謹慎に。その後バイクを盗むなどして3カ月で中退すると暴走族に入り、無免許運転や空き巣、恐喝、集団暴走と不良行為を重ねた。彼自身がブログで「周囲は暴走族つながりの悪い仲間ばかりで犯罪に抵抗がなく、むしろ誘われた」と記している。15歳で逮捕され、喜連川少年院（栃木県さくら市）に1年半、入院した。

孤独から地元に帰り再犯、少年院に3回入所

喜連川は11カ月以上の長期処遇者が入所する施設で、入所年齢は比較的低い。「規則が厳しくてスケジュールが厳格に定められており、自分の意思でできることはほとんどなかった」と、望月さんは振り返る。テレビを見ることもほとんどできず、私語はおろか笑うことも禁じられていたという。腕立て伏せ100回など運動もハードだったが「あまりその後の人生に役立つことはなかった」。
出院半年後に再び暴走行為や窃盗などの容疑で逮捕され、約1年間、東北少年院に入院する。ここで高卒認定をはじめ多くの資格を取ったことは、自信につながった。「資格を取ることで成功体験が積み上がり、自分もやればできることが分かって自信がついた。勉強して知識も得られた」。しかし18歳で出院すると窃盗団を組織し、全国の酒場で高級酒を盗んで売りさばいた。当時は「自分は一生犯罪者として生きていくしかない。だったら短期間で大金を稼いでやる」と考えていたという。窃盗は仕事のようなものだった。19歳で再び逮捕され、久里浜少年院へ。この少年院は「反社会的な価値観・行動傾向があるなど，非行の程度が深い少年」などを対象としており、複数回の入院歴がある院生も多い。
3度目に入った、久里浜少年院ではさまざまな気づきがあった。「入院者同士話もできたし、スケジュールも厳格な決まりはなく、将来に向けてやりたい事を探すため、自分で考えて行動できる時間が多かった」。本を読むようになったのも久里浜時代だ。「ホリエモン（堀江貴文）やドラッカー、自己啓発系の本から司馬遼太郎の小説まで幅広く」読み漁った。
望月さんは、3回も少年院に入ることになった一番の原因を「孤独からだったと思う」

と、推測する。喜連川、東北の出院後は、父親の紹介で地元を離れて就職した。周囲に遊び相手も、相談相手もいない寂しさで結局地元に舞い戻り、昔の仲間との関係が復活してしまった。久里浜を出る時も、過去に出院した時と同じように「出たら犯罪行為をするのだろう」と考えていたという。

人生変えたNPOとの出会い　自分の小ささに気付く

久里浜から出院する時、親とは音信不通で身元引受けもなかった。このため、出院者ら触法少年の自立更生を支援するNPO法人「クラージュ」に引き取られることになった。クラージュは出院者に寮を提供するとともに、提携するリフォーム会社や飲食店、建設会社での職もあっせんする。望月さんも入寮し、リフォーム会社で営業の仕事を始めた。「年の近い仲間と職場も寮も一緒で、孤独にならないのがいい。ここで暮らしていれば、地元に帰らずにすむ」。出院当初は非常に怒りっぽく、他人とケンカしそうになったこともあるという。しかしクラージュの仲間たちと、生まれて初めて海外旅行に行き、自分の「小ささ」に気付いた。「フィリピンのセブ島へ行ったら、食べ物も風景も何もかも違う。言葉も通じない僕に薬を売りつけようとする売人がいたりして、いろんな人間がいると思い知った。世界は広い、自分もこれから何でもできると思えて、人生の見方が180度変わった」。

ブログを始めて、他人のブログも読むようになった。桁違いのお金を稼ぎ出す営業マンらの文章を読み「人間性ではまだまだ彼らに及ばないのに、俺なに上から目線でもの言ってんの？と、自分のダサさが恥ずかしくなった」。望月さんは窃盗団時代すら、午前9時に起きてその日に酒を盗む「職場」探しをしていたという、ある意味で非常に勤勉な性格だ。お金を稼ぎたいという意欲もあり、弁も立つ。めきめきと営業成績を上げ、月に100万円を稼ぎ出すこともある。最近は「3回少年院に入ったトップセールスマン」としてメディアの取材も受けるようになった。同棲中の彼女もいる。「仕事も遊びもクラージュの活動も忙しくて、再犯しようと思ったことすらない」と笑う。かつての仲間の中には、今も刑務所にいる人もいるという。「彼らは未だに同じ仲間と同じことをしている。自分との大きな違いは、住む場所と仕事と仲間という『環境』を、変えたか変えなかったかだと思う」と話した。

少年院の経験に、何一つ無駄はない　3回入所が「ブランド」に

望月さんは少年院での経験について「後付けではあるけれど、すべて人生の糧になった」と断言する。「入院していなかったら、成人になってもまだ同じことをしていただろう」。入院中は意味を見いだせなかった「気を付け」などの行動訓練や、厳しい筋トレも「社会に出て規律を守る力、努力する力を培っていたのだ」と考えるようになった。教官たちと話したおかげで、敬語の使い方を覚えた。反省文を書くのも「本当に反省したかどうかは微妙で、書かされている面もあった」が、結果的に3000～4000字のブログを楽に書く力が身についた。被害者の気持ちを考えてみるという経験も、顧客の立場を理解し、必要な提案をする営業力につながった。

望月さんは人に、過去を包み隠さず話している。「少年院に3回も入ったと言うとあまりにマイナスイメージが大きく、今普通に働いているだけで『すごい』と言われる。ある意味で自分の『ブランド』になっている」。一方、過去の犯罪行為については「悪い事だったと自覚しているが、被害弁済もしたし、罪悪感を抱き続けているとまでは言えない」とも話した。

再犯しないためには夢が必要　海外で暮らし、自由を取り戻したい

望月さんは「誰かに何かをしてもらったというより、自分で勝手にいろいろなものを見つけてきた」と話す。子ども時代、信頼できた大人は「母親みたいに接してくれた」施設の担

当職員くらいで、教官たちから影響を受けることもあまりなかった。虐待を受けるなど、大人たちに傷つけられてきた望月さんだが、「自分も大人になってしまったし、人それぞれだと割り切れるようにはなってきた」とも話す。クラージュに来てようやく、「未来は明るい」と思えるようにもなった。

また、出院者が再犯しないためには、外の世界に「夢や希望」が必要だと、望月さんは考えている。「出院者はできることが少ないし、何かに挑戦した経験に乏しいので、新しいことになかなか取り組めない。例えばサッカーが好きだという子にはクラブチームを紹介するとか、『やりたい』という意思を、周りが後押しすることが大事だと思う」。

そんな望月さんの夢は、30代半ばまでに海外で暮らすことだ。「入院経験は良かったと思っているが、10代後半に自由を半端なく奪われたという気持ちはやっぱりある。働くのもブログを書くのも楽しいけど、海外で働かずに生活できるようになって、数年分の自由を取り返したい」と語った。

まとめ

不良行為を始めた理由
・小学校の頃から暴力を振るうようになる。周りも犯罪を止めるどころか、加担するよう誘うような環境で、犯罪行為に抵抗がなかった。最終的には「一生犯罪者として生きていくのだ」と思うように。

入院中に役立った支援
・資格取得によって成功体験が積み上がり、やればできると思えるようになった。読書習慣も身につけた。一方、喜連川少年院の私語厳禁、笑うことも禁じられるといったルールなどには疑問を感じている。

出院後に困ったこと
・地元を離れて就職したが、孤独感から結局昔の友人とアクセスしてしまい、再犯を繰り返した。

必要だと思う支援
・「やりたい事」を一緒に探し、見つかったら具体的に行動に移すための後押しをする支援。（サッカーが好きな子には、クラブチームを紹介するなど）

再犯の歯止め
・触法少年の自立を支援するNPO法人「クラージュ」の仲間たちと一緒に過ごしたいと言う思い。海外旅行で自分の「小ささ」を思い知った経験や、30代で海外移住したいという夢。

田口良樹さん（仮名・27歳）　建設会社経営

（略歴）
1992年群馬県伊勢崎市生まれ。中1と中2の計2回、暴走族への加入を迫るメンバーを返り討ちにして暴行傷害罪で逮捕され、前橋少年院に半年間ずつ入院。19歳の時、あおり運転を注意した相手と乱闘になって死なせてしまい、過失致死罪で千葉刑務所に入り禁固2年の刑に服した。出所後は、トレッキングや川下りなどを楽しむアウトドアレジャー「キャニオニング」のガイドをしながら実家の建築塗装業で働く。2019年に独立し、実家近くで塗装業を営む傍ら、カフェバーの運営などにも携わっている。

暴走族返り討ちにして少年院へ　教官は正論一点張り

田口さんは、建築塗装業を営む一家の長男だ。昔から家族仲は良く、尊敬する大人は両親だという。「父親には、子どもの頃しょっちゅう殴られたが、理由は納得できた」。田口さんは運動神経に恵まれ、7歳の頃から空手とキックボクシングを習っていた。中学に入ると格闘技の腕を見込まれ、暴走族から勧誘を受けるようになる。当時、伊勢崎市は治安が悪く、不良グループも多かった。当時サッカー部だった田口さんは、誘いを断り続けた。だが中1の終わりごろ、怒った暴走族メンバーとケンカになり、相手にけがをさせてしまう。3カ月の予定で、前橋少年院に入った。田口さんは「火の粉を払ったつもりでやりすぎてしまったが、自分が悪いとは全く思わなかった」。教官に「反省していない」と話し、被害者への謝罪文も書かなかった。両親も「自分に非がないなら堂々としていろ」と言った。院内では、私語厳禁のルールを破ってしつこく話しかけてくる院生を無視していたらケンカになり、出院が3カ月延長された。

出院すると、担任や友人の親などから「悪い子」のレッテルを貼られた、と感じた。周囲の大人への反発心が強まり「自分は悪くないのだから一歩も退かないぞ、という鉄の誓いのようなもの」が固まったという。その後も暴走族に入る気はなく、走って勧誘から逃げ回っていた。だが中2の終わりごろ、暗がりで3，4人に囲まれた。「やり返さなければ袋叩きに遭うのは明らかだった。相手は武器を持っているかもしれないという怖さもあり、身を守るのに必死だった」と振り返る。結果、再び相手を傷つけて逮捕され、再入院した。

教官は「話の分からない大人」

教官の中には、再入院した田口さんを見て「やっぱりな」と冷笑する人もいた。「その言葉にカチンと来て、よけい彼らに対して頑なになった」。少年院の教官には「話の分からない大人」という印象しかないという。「あれをしろ、これをしろ」と指示するだけで、面談の機会も、会話らしい会話もなかった。事件についても「（暴走族から）どうして逃げなかったんだ」「警察を呼べばよかったのに」と、正論を繰り返す。田口さんは「通報する余裕も逃げ場もなく数人に囲まれたら、教官たちだってやり返すんじゃないか」と、反発を感じるだけだった。結局少年院では、指示されるまま惰性で過ごしたという記憶だけが残っている。「私語厳禁、目も合わせるなといったルールに縛られ流されているだけで、自分の考えを掘り下げる気にはならなかった」。

出院後は、気性のまっすぐなサッカー仲間ではなく、大人への反発を共有する「悪い仲間」とつるむようになった。高校を1カ月で中退してからは自暴自棄になり、道でガンを付

けられるなどささいなことから、日常的にケンカを繰り返した。「暴力に麻痺してしまって、善悪どころか何も考えていなかった」。
　生活が変わったのは16歳の時だ。部活時代の友人に誘われて、ライブを見に行った。久しぶりに「普通の人」と過ごす時間は新鮮で楽しく、ステージと観客の一体感にも惹かれた。田口さんは「自分もやりたい」と、悪い仲間を離れてバンド活動に熱中するようになった。「家にほとんど帰らず友人宅から実家に出勤し、塗装の仕事が終わると練習やライブ。夜寝る間もなかった」と話す。

乱闘で相手を死なせた　禁固刑も「当然のこと」

　19歳のある朝、バンドのメンバーと車に乗っていると、後続車にあおられた。車を止めて注意すると、運転手が逆上し乱闘になった。田口さんが殴りつけると、相手は後頭部を打ってその場に倒れた。警察や救急車が駆けつけ、田口さんは傷害容疑で現行犯逮捕された。この時はまだ相手に意識はあったが、警察署内で取り調べ中、亡くなったと聞かされた。「その瞬間、頭が真っ白になった。彼が悪いとか悪くないとかは吹っ飛び、ただ事実に打ちのめされた」。目撃証言などから、故意はなかったとして過失致死罪で家裁に送致された。20歳まで前橋少年院で過ごした後、千葉刑務所で2年の禁固刑を受けた。「少年院の経験はあまり糧にはならなかったが、刑務所での2年間は、人生に大きな影響を与えた」と、田口さんは言う。禁固刑は所内作業も運動やテレビを見る時間もなく、ひたすら自分の房で1人過ごす。地下だったので、朝か夜かも分からなかった。あまりのつらさに、体重が服役中に25キロも減ったという。だが「人が死んでしまったという事実に比べれば、禁固刑など当たり前だと思った。事件のことをひたすら申し訳ないと懺悔し、ノートに書き続けた」。
　刑に服して2年後、改めて成人として刑事裁判を受けた。傍聴席には、被害者の親や婚約者の姿もあった。遺族がいる、というプレッシャーから過呼吸に陥り、裁判の記憶はあいまいだという。執行猶予付きの判決を受け、その場で釈放された。21歳だった。遺族に謝罪したいと申し出たが「殺してしまいそうなので来ないでくれ」と拒否された。
　事件から8年、田口さんは毎月、被害者の墓参りを欠かしたことはない。「『自分のしたことを忘れないようにしよう』といつもどこかで思っている」という。

婚約者の死「大事な人を失うことが、初めて分かった」

　出所後は人混みでトラブルに出くわすのが怖く、外出を避けていた。だが「友達しか集まっていないから大丈夫」と友人に誘われ、フットサルに通い始める。会場の受付にいたのが琴子さん（仮名）だ。「人の輪を広げたい」と話す活動的な彼女と交際を始め、23歳の時に婚約した。だが彼女はスノーボードに行った長野県で、交通事故に遭い亡くなってしまった。「大事な人を失うのがどういうことか、初めて分かった」。葬儀や納骨を終えると、生きる気力も湧いてこなくなった。表向きはそれまで通り、仕事や友人との付き合いを続けていたが「気が付いたら4階の足場から落ちていた」こともある。地元にいるのが嫌になり、彼女と「いつか一緒に行こう」と約束していた北海道に渡った。
　しばらくスノーボードのインストラクターやレストランの従業員をしていたが、次第に「2人の墓参りをしながら悩んでいても仕方がない。人のためになる仕事をしたい」と考えるようになった。そんな時知人から、キャニオニングのガイドをしないかと声が掛かった。

「お客さんの命を守り、楽しい経験をプレゼントできる」ことに魅力を感じ、誘いに応じた。お客さんに安全に過ごしてもらいたいと、上級救命技能士の資格も取得した。
　琴子さんが亡くなった時、彼女の両親は田口さんにこう話したという。「娘が人生の最後に、一緒に暮らそうと選んだのは君だった。彼女にいつ見られても恥ずかしくないように生きてほしい」。田口さんもそれを聞いて「自分を選んだ彼女の選択が、間違いじゃないことを証明したい」と考えるようになる。少しずつ暴力に頼らず、他人に絡まれてもなだめたり話を逸らしたりする力を身につけていった。

日常は当たり前じゃない　2人の死で気づいた

　田口さんは、キャニオニングの仕事をしながら実家を手伝っていたが、昨夏、自分の会社を立ち上げた。「親には迷惑を掛けたので、実家が受けきれない仕事を引き受けたり、人手不足の時に職人を回したりして恩返ししたい」と考えたためだ。被害者と婚約者、2人の死を通じて田口さんは「日常生活が、実は当たり前ではないことに気づいた」と話す。結婚し子どもに恵まれてなおさら「家族を悲しませるリスクが大きすぎて、人に手を出せなくなった」。「人を傷つけ死なせてしまった自分にも、愛してくれる妻と子どもがいて、幸せになれたことは本当にありがたい。家族や友人が支えてくれたおかげだし、これからは彼らを大事にしたい」と語った。

まとめ

不良行為を始めた理由
・暴走族の勧誘を断っているうちにトラブルになり返り討ちにして入院。出院後は「大人への反感」を共有できる居心地の良さから不良仲間とつるみ、ケンカを繰り返した。

入院中に役立った支援
・少年院での生活は、教官への不信感を募らせただけで役立ったことはあまりない。19歳からの禁固刑で、ひたすら人を死なせてしまった事実と向き合い、懺悔を繰り返した。

出院後に困ったこと
・当初は人混みでトラブルに遭遇し、同じことを繰り返すのが怖かった。未成年だったので実名を報道されず、出所後は実家に勤務したため、生活や就職で困ったことはない。

必要だと思う支援
・正論で子どもを押さえつけるのではなく、話に耳を傾け、子ども自身の好きなものを探す支援。

再犯の歯止め
・事故死した婚約者に対して恥ずかしくないように生きなければという思い。妻子ができて、悲しむ人の数が多くなったこと。

鈴木玲士さん（21歳）　キャバクラ店勤務

（略歴）
1998年生まれ、愛知県出身。都内在住。16歳の時、無免許運転で事故を起こして危険運転致傷罪で瀬戸少年院へ1年間入院。出院後は実家へ帰り、電気工事会社に勤務。被害弁済が終わった2018年に上京。寮付き派遣の工場勤務を経て、キャバクラ店員として働きながら出院者支援NPOの立ち上げを目指す。

母子家庭で働きづめの母、同級生とチーム組み暴走

鈴木さんは母子家庭で育った。母親は働きづめで子育てに関わる余裕がなく、鈴木さんと弟は、子どもだけで過ごすことも多かったという。周囲には「悪い友人」が多く、鈴木さんは、中学の頃から同級生と「チーム」を作って万引きや暴走行為を繰り返した。入院前にも逮捕歴がある。

16歳の時、友人たちと無免許で車を運転し、人身事故を起こしてしまった。相手は軽傷だったが、危険運転致傷容疑で逮捕され、愛知県の瀬戸少年院に入院した。鈴木さんが事故を起こした時、母親は「私が仕事で見てやらず、放任したからだ」と自分を強く責めたという。入院後、月1回の面会で親子は言葉少なだったが、母親は「出院したら、いっぱいいろんなことしようね」と、鈴木さんに話したという。

院内では週3日の実習のほかは「特にやることもなかった」。高卒認定試験も、強く勧められることもなく特に取らなかった。実習はサービス課に配属され、ミシンで院生の服の修理などをしたという。ただ鈴木さんは少年院で、初めて素直に大人の言うことに耳を傾けるようになる。それまで接してきた学校の教師たちは、ただ鈴木さんを叱責し、反省文を書かせるだけで「怒られたイメージしかない」。だが少年院の法務教官たちは総じて、言い訳も含めて話をよく聞いてくれた。「やっちゃったことはしょうがないよ。やらないようにするにはどうすればいいか一緒に考えよう」と寄り添う教官たちの姿勢は「学校の教師とは全然違った」と話す。

「人を頼れ」教官の言葉がきっかけに

担任の教官は、入院した鈴木さんに「心が晴れるノート」というワークブックを渡した。自分のストレスを自覚し、バランスの良い考え方や問題解決方法を学ぶ、認知療法の自習をするための冊子だ。鈴木さんは当時、カッとしやすく態度も乱暴だったが、ワークを通じて感情をコントロールできるようになった。現在、勤めているキャバクラには理不尽な客も多いが「店で怒ったことはないですね」と話す。また事故で背負った200万円もの弁済について、具体的な返済方法や、自分のなすべき行動を考える役にも立ったという。院内で、初めて本の面白さにも目覚めた。最初は分からない漢字が多く、辞書を引き引きビジネス書や心理学の本を読んでいった。堀江貴文の著書を片っ端から読み、経済に興味を持った。「読書はいろんな人の考えが分かって楽しい。今でもよく読みますよ」。

出院前日の教官の言葉は、メモも取っていなかったのに、鈴木さんの頭にずっと残っている。「人生で一番大切なことが３つある。最初は信念を持つこと。自分の中にある譲れないものを貫いてほしい。2つ目は常に今日が勝負だと考えること。毎日寝る前に『今日は良い1日だった』と思えたら、必ずいい人生を送れる。3つ目は人を頼ることだ」。特に「人を頼れ」という教えは、鈴木さんの考えを大きく変えた。「昔は人を頼ることが苦手だった。1人で突っ張って生きてきて、弱みを見せると負けだと思っていた」。今、鈴木さんが頼っているのは主に母親だ。以前はろくに話もしなかったと言うが、出院してからは、困ったことがあるとすぐに相談している。「母も変わったが、僕も変わったと思う。親子の仲は今、めっちゃ良いです」。一方、必要性に疑問を感じた活動は、集団で「気を付け」「休め」の姿勢や挨拶、返事などを学ぶ行動訓練だ。「『気を付け』で指をぴんと張るなど、細かい部

分を繰り返し訓練させられて苦痛だった」と振り返る。

出院者支援のNPO作りたい　被害弁済終わり上京

　出院して地元へ戻ると、母親の知人の電気工事会社で働き始めた。鈴木さんが出院者であることは最初から知られていたし「周囲もやんちゃしている人ばかりだったので、特に反発はなかった」。給料の中から毎月一定額を被害弁済に充てた。
　昔の仲間とはほとんど関わらなかった。同級生は17～8歳で、卒業記念などと理由をつけて、バイクの「走り納め」や「最後の悪さ」をしがちな時期だと分かっていたからだ。「携帯の写真を見て、懐かしい思ったこともあるけど、彼らと関わるのが一番再犯しやすいと分かっていたので会わなかった」。その代わり、なるべく家族との時間を作るようにした。母親や5歳下の弟と、外食や買い物を楽しんだ。筋トレや料理にはまって、悪い事以外にも楽しみがあると思えるようになった。ちなみに鈴木さんによると「出院者って筋トレが好きな人が多い。少年院時代のトレーニングの名残りですかね」。
　2年ほど経って弁済が終わった時、自分が何をしたいのかを改めて考えた。その時思い浮かんだのが「NPOを立ち上げたい」という思いだ。少年院にいた時、出院者を支援するNPO代表者の講演を聞き、鈴木さんは「こんな生き方があるんだ」と衝撃と受けた。「支援者に対しては『お前に何が分かる』と反発する出院者もいるかもしれないが、同じ経験をした自分には、心を開いてくれるのではないかと思った」。NPO関係者は東京に集中しているし、大都市の方が活動の余地も大きいだろう。そう考えた鈴木さんは「取り立てて計画も立てず」に急に上京した。

キャバクラ勤めで資金づくり　小さなことに幸せ感じる

　上京当初は、派遣労働者として寮付きの工場で働きつつ、夜にキャバクラのバイトに入るダブルワークをしていた。そのうちキャバクラの社員となり、派遣の仕事を辞めた。社員になってからは「40代の平均年収くらいは」稼げるようになり、NPO設立資金もたまりつつある。
　ただ「夜業のメリットは、お金だけ」とも語る。勤務時間は午後3時から、午前１時、２時に及ぶ。重労働の上に昼夜逆転で体のリズムが狂い、休日も寝て過ごすことが多い。NPOの設立準備に充てる時間が取れないのも悩みだ。キャバクラ勤めという自分の境遇に納得がいかず、自暴自棄になることもしばしばだ。だが「外で自由に好きなことができるのが一番幸せ。再犯して、もう一度同じ環境に置かれるのは、怖いし耐えられない」という思いは強い。ストレスがたまると友人と飲みに行ったり、ジムに通ったりして発散している。少年院での経験と引き比べて、小さいことに幸せを感じられるようにもなった。この日の朝もスーパーで、好きな青椒肉絲の材料を買い「好きなものを買える自由っていいなあ」としみじみ思ったという。ただ、鈴木さんは就職先をはじめ、周囲に出院者であることは伏せている。「事実を明かしたら、自分に対する印象が変わってしまうのではないかという怖さが、どうしてもある」と語った。

将来の夢を思い描けるかが、再犯の歯止めに

　出院した昔の仲間の中には、不良グループに戻って再入院した人もいるという。「再犯する子は、昔の仲間と会ったらどうなるかという、危機管理能力がない。それは将来の夢が何もないからだ。ヒマで遊ぶ時間もあるので、犯罪を繰り返す」。鈴木さんは、入院中から漠然とではあるが出院者支援の仕事を志し、少しずつ夢に向かって進んでいる。最近は休日に、できる範囲で出院者をサポートする団体のボランティアなどに参加し、人脈づくりを試みているという。また、入院中に経済を学ぶ延長線上で株式投資を知り、投資の知識も身に

つけてきた。成人してから外国為替証拠金取引（FX）を始めたが「リスクの高い投資はしない」と言い、運用の姿勢は手堅い。「今年中に昼間の、それもできればNPOの仕事に近い職業に転職し、投資で得た利益と合わせて生活できるようになりたい」というのが、今の目標だ。「やりたい事があると、昔の不良行為もくだらない事だと思える。できれば入院中にやりたい事を見つけておくと、出てからの行動がだいぶ変わるのではないか」と話した。一方で、鈴木さんには「普通の生き方をしたい」という願いもある。「会社勤めでも何でもいい、とにかく『普通』になりたい。そして将来NPOを立ち上げた時、出院者であることやキャバクラでの勤務経験を、自分の『売り』にするのが理想の姿です」と話した。

まとめ

不良行為を始めた理由
・母子家庭で母親は働きづめのため、子どもに目が行き届かなかった。周囲にも悪い友人が多く、中学の頃から暴走行為や万引きを繰り返すように。

入院中に役立った支援
・信頼できる教官と出会えた。認知療法のワークを通じて、感情のコントロールや課題解決の方法を学べた。人に頼ることの大切さも学び、読書習慣も身に付いた。一方、行動訓練は苦痛だった。

出院後に困ったこと
・お金を貯めるためキャバクラに勤めている今の境遇に、不満を覚えて自暴自棄になることがある。深夜に及ぶ重労働で、NPO設立という目標に向けた準備がなかなか進まない。

必要だと思う支援
・入院中に、漠然とでもいいので、やりたい事を見つけるための支援

再犯の歯止め
・「出所者支援のNPO立ち上げ」という目標。ささいな事柄からでも、自由に暮らせる幸せを感じられるようになったこと。ストレスを感じたら、筋トレや飲み会で発散。

浜田雅也さん（仮名・32歳）　飲食業経営

（略歴）
1988年生まれ。神奈川県横浜市出身。18歳の時、覚せい剤取締法違反（所持）容疑で現行犯逮捕。詐欺容疑で再逮捕後、成人の刑事裁判で3～4年の不定期刑の判決を受け、川越少年刑務所に収監された。23歳で出所後、会計事務所勤務などを経て、25歳で飲食業などのビジネスを興す。MBA取得を目指し大学院にも通っている。

やんちゃからプッシャーへ　不良グループはブラック企業だった

　浜田さんは中学時代、不良グループのメンバーとバイクを乗り回す一方、ごく普通の中学生として友達とカラオケなども楽しむ「二重生活」を送っていた。だが16歳で暴走族に関わるようになると、薬物使用やプッシャー（売人）など「がっつり悪さ」をし始める。「やんちゃしているうちに犯罪を引き受けるようになり、次第にそれがメインになった。遊ぶ金を一番短時間で稼げる方法は何かと考えた時、先輩や仲間が『仕事』を紹介してくれた」。
　しかし、不良グループは自由に遊び回るどころか「自分の時間は一切なかった」。先輩の命令は絶対で、早朝でも電話で呼び出され、運転などを命じられた。「ブラック企業」のようなもので、「まじめに悪いことをしていた」。逮捕直前には、仲間たちも精神的な余裕を失い、もめ事が絶えなかった。「お互い『仲良かったはずなのに、嫌だよね』と話していた。きつい、抜けたいと思うようになっていた」。
　高校卒業後、18歳で覚せい剤と大麻の所持が見つかり現行犯逮捕された。「変な話だが、これでグループと距離を置けると嬉しかった」。留置場で、久しぶりに熟睡したという。数カ月の鑑別所暮らしで済むかな、と淡い期待をしていた浜田さんだが、実は薬物だけでなく、オレオレ詐欺のリーダーとして「受け子」の派遣や集金も任されていた。詐欺罪で再逮捕され逆送致の上、成人の刑事裁判を受けることになった。

親の言葉がきっかけに。拘留中「変わろう」と決意

　少年鑑別所や留置場での拘留期間を含めると、浜田さんの入所期間は約5年に及ぶ。逮捕された当初は「自白すれば地元に戻った時、何をされるか分からない」という恐怖から、黙秘を続けた。孤独と重圧から食事ものどを通らなくなり、吐いてしまうこともあった。両親は毎週面会に来て「やっていないよね」と繰り返した。浜田さんも「やってない」と答えたが、正直に告白したいという思いも募っていた。
　そんな時、刑事がこんな話をした。「ご両親に『まだ彼を信じているんですか』と聞いたら、『信じます。私たちがあの子を信じないなら、誰が信じるんですか』と言われた」。浜田さんはこれを聞いて強く「自分は変わらなければ」と思う。次の面会で、親に正直に話し、謝罪した。判決は3～4年の不定期刑と、予想以上に重かった。「当時は刑期が長すぎると思ったが、今思えば１年で出ていたら周囲の人間も変わらず、地元に戻って同じことを繰り返していただろう」。それでもこの頃はまだ「どうして俺だけこんな目に」という不満もあった。またリーダーという立場上、被害者と直接会うことがなかったため、被害を出した実感も薄かった。だが刑務所で、被害者へ手紙を書いたり、被害者の気持ちになりきるロールプレイをしたりすることで、自分の罪の大きさに気付いたという。「場合によっては被害者が自殺したり、家庭が崩壊したりすることもあると、その時に知りました」と話す。

時間を止めたくない　テレビのコンセント抜き、汗まみれで勉強

　浜田さんは「常に前進したいタイプ」と自分を評する。少年刑務所に入ると、拘置所では

見られなかったテレビ視聴なども許され最初は面白かったが、じきに飽きた。「教官はよく『ここは時間が止まっている』と言うけれど、僕は時間を止めたくなかった。5年を無駄にするなんて耐えられなかった」。働く経験もなく出所することになる危機感や、地元を見返したいという気持ちもあった。浜田さんは刑務所で初めて本を読むようになり、世界が大きく広がったという。特に日本マクドナルド創業者、藤田田の著作に影響を受け「起業するなら簿記、英語、PCだ」と、英検2級と簿記2級の勉強を始めた。「ついスイッチを入れてしまいそうで怖くて、テレビのコンセントを抜いて勉強した」。川越市は夏の酷暑で有名だ。汗まみれで勉強を続けるうちに、次第に自信が積みあがった。「7つの習慣」を熟読し、ミッションステートメントも作った。「感謝」「変化」など大切にしたい言葉を挙げ、1日10個、感謝したことを日誌に書いて、ポジティブ思考を身に付けようとした。書道や造園など、当初「やる意味が分からない」と反発していた作業も「どうせなら怠けるより、花の名前に詳しくなって女子とのトークに使おう」などと、思考をポジティブに切り替えるように心掛けた。

少年対象の工場時代は「訓練が充実し、目標に向かって学べて楽しかった」と振り返る。女性の主席専門官も、よく入所者の話を聞いてくれた。刑務所側に掛け合って経営学や歴史など、入所者が希望する学科を取り入れてくれたこともある。「どんな悪ガキも、こういう人の前では素直になる」。しかし彼女が異動すると、カリキュラムは元に戻ってしまったという。

「キミは若いからやり直せる」　年上の受刑者の励ましで大学を志す

成人すると、学習そのものへのハードルが一気に上がった。PCやCAD、情報処理の技術を学べるのは、最も規律が厳しいとされる工場だけで、浜田さんはこの工場をあえて選んだ。吐くまで走る、筋トレするなど先輩の理不尽な命令に従わされ、「オヤジ（教官）も長期受刑者を『握って』、ゴマをする奴を見逃してやっていた」。勉強していると、同室者に「感じ悪い」「しらける」などと言われる。浜田さんは、掃除など割り当てられた仕事を完璧にこなし「誰にも文句を言わせないようにして勉強した」。

そんな中で、年上の受刑者たちとの出会いが、浜田さんに新しい世界を開いた。「入所前は、不良グループに属する自分の仲間や先輩以外の人間は『くず』くらいに思っていた」。しかし受刑者は大学出身者や外国人、PCオタクなど多彩だった。特に大卒受刑者たちは、「キミは若いから、全然やり直せる」「大学に行ってみれば？」と浜田さんを励ました。英語の勉強を助けてくれたり、参考になる本も教えてくれたりもした。この時初めて、浜田さんは「大学を目指してみよう」と思うようになった。

「もっと素敵な景色を見たい」　激務でも踏みとどまった

出所者が親元に戻ると、結局、元の不良グループに吸収されてしまいがちだ。浜田さんも「刑務所の中で『薬をやめて一緒に頑張ろう』と言い合った仲間と外で会ったら、シャブ中に戻っていた」経験がある。自身は23歳で出院すると、すぐに家を出て上京した。派遣労働者として夜間、倉庫作業などをしつつ、昼間に面接を受けた。スキルも経験もないため何十社も落とされたが、簿記の資格が幸いし、会計事務所に採用された。前科は隠し、5年間の履歴書の空白は「受験勉強をしていた」と言ってごまかした。「僕は大卒者と同じ年代でラッキーだった。逮捕時に少年で、名前が出なかったことも大きい」。友人の中には、成人で名前が報道され、彼女に名前を検索されて前科がバレたり、前科を隠すため婚家に入って苗字を変えたりした人もいるという。会計事務所では、あえて多くの仕事を引き受けた。激務でつらかったが「刑務所で必死に勉強し、頑張った自分を無駄にしたくない。もっと素敵な景色を見たいという一心で踏ん張った」。

起業を志していた浜田さんは、3年ほどで会計事務所を辞め、25歳で高校時代の友人とともに、今の会社を興した。経営の傍ら大学院で学び、MBA取得も目指している。また、自

社で出所者を雇い入れたり、出所した後輩たちの相談に乗ったりもしている。いずれは「出院者を経営者にする」ことに取り組みたいという。「最近は容疑者が未成年でも、SNSで顔や名前をさらされるようになり、少年犯罪の厳罰化も進んでいる。ただでさえ人は弱いのに、こうした厳しい環境の中ではなおさら、誰かの助けなしに『外』にいるのは難しい」。専門学校に行きたいが、住所が更生保護施設だと願書を出せない、住所を書けず携帯電話を契約できない…。浜田さんの元には、後輩たちからさまざまな悩みが寄せられる。「僕が彼らの『錨』となって『浜田さんと約束したから外で頑張ろう』と思ってもらいたい。彼らの存在は僕にとっても、研鑽を重ね成功し続けなければという励みになっています」と話す。

まとめ

不良行為を始めた理由
・最初は遊びのつもりだったが、遊ぶ金を稼ぐため薬物売買などを始め、犯罪行為がエスカレート。最終的にオレオレ詐欺のリーダーを務めるようになった。

入所中に役立った支援
・被害者への手紙やロールプレイを通じて、罪の大きさに気付いた。読書するようになって起業を志し、簿記と英検を取得。必死に勉強した経験が自信になった。入所していた大卒者から励まされたことで大学進学を志すように。

出所後に困ったこと
・高卒の学歴でスキルも職務経験もないため、面接で何十社も落とされた。

必要だと思う支援
・人間関係という「錨」。困った時に相談に乗ってくれて「あの人と約束したから頑張ろう」と思える相手。

再犯の歯止め
・「入所中、必死に勉強した努力を無駄にしたくない」という思い。相談に乗っている後輩たちのロールモデルとして、身を律するようにしていること。
・変わりたいという強い「意志」「生活拠点」「付き合う人間」が重要。

川口大介さん（仮名・24歳） 人材サービス会社経営

（略歴）
1996年横浜市生まれ。小学校時代は成績優秀だった。中2の頃「グレ始めた」兄に憧れて、不良行為を繰り返すようになり、犯罪グループのリーダーに。詐欺罪や窃盗罪などで逮捕され、16歳で千葉県の八街少年院に1年半入院した。院内で高卒認定資格を取得し、出院後は専門学校から法政大に編入。その後外資系企業2社などでの勤務を経て2020年1月、出院者・出所者らを対象とした就職紹介ビジネスを起業した。

「ドロップアウトもカッコいい」、兄を追い掛けて不良の道へ

川口さんは「中の上くらい」のサラリーマン家庭に育った。小学生の時は週3回塾に通い、サッカーや水泳、柔道など多くの習い事をしていたという。「好奇心旺盛でやりたい事がたくさんある反面、多動でじっとしていられない傾向もあった」。全国模試上位に食い込むほどの優等生でありながら、万引きやいじめ、ケンカもする「エリートヤンキー」だった。「親の期待を感じ取り、進学校に進まなければと自分で自分を抑圧していた面もある」と振り返る。

中2の時、進学校に通う3歳上の兄が、部活でのいじめが原因で中退してしまう。もともと「やんちゃキャラ」だった兄は背中に入れ墨を入れ、警察に捕まって何度も少年鑑別所に入った。それを見ていた川口さんは「ドロップアウトするのもかっこいいじゃないかと思ってしまった」。プレッシャーから解放されて全く勉強しなくなり、家出同然でヤンキー仲間と上野や新宿をたむろするようになった。高校も3カ月で中退。ヤンキーの先輩に可愛がられ、犯罪グループ7人のリーダーを任された。しかしグループの1人が捕まり、川口さんらは大阪へ逃れた。キャバクラのスカウトやキャッチなどで日銭を稼ぎながら暮らしていたが、3カ月後に警視庁の刑事が来て逮捕された。窃盗や詐欺容疑で計4回再逮捕され、横浜家裁で1年半の少年院送致が決まった。

兄弟3人そろって「ぐれて」しまった理由を、川口さんは「兄も自分も悪い世界である意味『成功』し、下が順番に上のカッコよさを追いかけてしまったのかもしれない」と推測する。母親は、3人の息子が違法行為を繰り返す中で精神的に追い詰められ、一時は外出すらままならなくなった。ただ現在、兄は建築会社を経営し、弟は技術職として働いている。家族仲も良好で、母親も「あれも必要な試練だったのかもしれない」と話すことがあるという。

内省の中で「歪んだ常識」を修正　社会の格差も知った入院経験

「入院するまでは、闇の世界に染まりすぎて常識が歪み、騙される方が悪いくらいの考えでいた」と、川口さんは振り返る。逮捕された時も「失敗しちゃった」という思った程度で、反省や更生をしようという意識は薄かった。

八街少年院は比較的年齢の高い、犯罪傾向が強めの少年が入院する。中でも川口さんは、1年以内に出院する少年が多い中、1年半という長期の決定を下された。同少年院は運動の厳しさでも知られる。しかしスポーツが得意な川口さんにとっては、むしろ実力を発揮できる楽しい時間だった。入院3カ月で寮長を務め、最後は素行優秀者として表彰もされた。院内では高卒認定のほか、危険物取扱者に珠算3級、漢検、英検など多くの資格を取った。中

2以降全く学んでおらず、「サインコサインもやり直し」で初めはつらかったが、元々勉強は嫌いではない。次第に「知識が身についていく喜びを味わえた」。多動気味だった小学校時代は、授業中座り続ける事すらできず、読書などもってのほかだった。だが少年院では、小説からビジネス書、自己啓発書など手当たり次第に読み漁った。また担当の教官は、米国の保護観察所での勤務経験があり、海外体験を語ってくれた。いつか海外で働きたい、と思っていた川口さんは強く影響を受け「もしこの教官に合わなかったら、後に外資系企業への就職を目指すこともなかったと思う」と振り返る。反省文を書いたり、座禅を組んだりするうちに内省も深まり「被害者のことを考え、自分がひどいことをしてしまったという罪悪感と後悔にも囚われるようになった」。一方、私語厳禁のルールについては「ただでさえ、多くの院生はコミュニケーションが苦手。話をしなくなると表現能力がさらに低下してしまうのでは」と疑問を呈する。ごく中流の家庭に育った川口さんにとって、入院は社会の格差を知るきっかけにもなった。川口さんの両親は毎月面会に訪れたが、親が顔を見せない院生も多かった。貧困家庭の子どもや虐待被害者、自閉的な傾向があり、人前では話もできない院生もいた。川口さんは彼らと接するうちに「自分は恵まれているのだから、人のために何かしなければ」と思うようになった。

「うまくいってない」更生をバネに起業

川口さんは17歳の12月に出院したが「僕、実は更生全然うまくいっていないんです」と漏らす。3カ月間、猛然と受験勉強したが志望大学には届かなかった。まず外国語の専門学校に入学し、法政大の3年に編入したが、4年生の時に中退してしまう。「遊びたい欲」に火が付き、クラブDJなどにはまって学校に行かなくなったのだ。クラブでは、反社会的な人々との接点もあったが「海外で働きたい」という夢が歯止めになり、彼らに深入りはしなかった。就職活動をして韓国LGグループの関連会社に入社、その後デンマークの物流会社に転職し、日本法人の立ち上げなどに携わった。外資系を選んだのは、中学時代の親友の影響も大きい。一緒に悪い仲間にいたが、中2の時に心機一転勉強を始め、高校で海外に留学した。現在、有名ベンチャー企業の経営に携わる彼の生き方に「俺も頑張らなくちゃ」と刺激を受けていたという。

ただ、企業で働く中で川口さんは「自分が本当にやりたいことは何だろう」と考えるようになった。自分にしかない経験を通じて、社会に貢献できることはないだろうか。たどり着いたのが「出院後の立ち直りが、一番大変だった」という思いだ。高卒認定は取ったが受験に失敗し「学歴がめちゃめちゃ」なことが、人生の選択肢を大きく狭めたと感じている。地元では「あいつと関わるとやばい」と避けられた。過去を伏せたまま友人を作ると、親しくなるほど会話に矛盾が生まれ、不審がられた。専門学校時代、ある友人に入院経験を打ち明けたら多くの人に広まり、一部の人から白い目で見られたこともある。

川口さんは出院者や出所者の再挑戦には、まず就職先という新たな環境を提供することが大事だと考え、就労支援のビジネスプランを作った。出院者らを企業に紹介し、採用されたら企業から報酬を受け取るスキームだ。志望者には就職カウンセリングを実施し、支援団体とも連携して、職場に定着できるよう支援する。この案がビジネスコンテストの最優秀賞を受賞したことが、起業のきっかけになった。退路を断つため周りに「23歳のうちに起業する」と宣言し、24歳の誕生日前日に会社登記した。

「人間は弱い生き物」環境整備が再犯防止になる

「人間は弱い生き物で、隣にいる人に週3回犯罪行為に誘われて、Noと言い続けるのは難しい。歯止めになるはずの家族などの『糸』も、距離の近い人に比べれば弱い。周囲に不良行為をする人がいない環境を整えるのが、再犯防止に最も大事」と、川口さんは強調する。川口さん自身、出院後にSNS を始めると、昔の仲間とのつながりが復活した。完全に拒絶して機嫌を損ねるのも怖く、距離を保ちつつ付き合っている。もし少年院に入っていなかったら「いわゆる『半グレ』のようになっていたかもしれない」と話す。川口さんを外の世界に引き止めるのは「黒い世界ではなく、もっと広いまともな世界で認められたい」という思いだ。

創業したての経営者として、乗り越えるべきハードルはまだまだ多い。雇用の受け皿となる企業も開拓しなければならず、運営資金を確保する必要もある。だが「ここ2、3年、コンテストの入賞や起業などを通じてやっと自分に自信がつき、出院者であることも明かせるようになった」と明るい表情を見せる。川口さんは将来について、次のように語った。

「スーパーマンのような遠い存在ではなく、自分のような普通の人間が自然体で活動することで『川口にもできたんだから、俺にもできる』と思ってもらいたい。それによって生きづらさを抱える多くの人が、夢を持てるようになれば、と思います」と話す。

まとめ

不良行為を始めた理由

・小学校から成績優秀な半面、万引きやケンカもする「エリートヤンキー」だった。成績に対してプレッシャーを感じていた分、いったん道を逸れると反動で悪い方へエスカレートした。ぐれ始めた3つ上の兄を、カッコいいと感じたことも大きな理由。

入院中に役立った支援

・資格取得の勉強を通じて知識が身に付く喜びを味わい、読書習慣も身に付いた。反省文を書くことで、被害者への罪悪感も生まれた。一方、私語厳禁のルールは、コミュニケーション能力を低下させると感じた。

出院後に困ったこと

・「学歴がぐちゃぐちゃ」で、人生の選択肢が狭まった。入院経験を伏せたままだと話に齟齬が生じ、深い友人関係を築きづらい。友人に入院経験を明かしたら、多くの人に広まり白い目で見られたことも。地元でも「あいつに関わるとやばい」と避けられた。

必要だと思う支援

・昔の仲間に誘われないよう、新しい職場と人間関係という環境を提供すること。

再犯の歯止め

・「海外でビジネスマンとして頑張りたい」という目標と「広いまともな世界で認められたい」という承認欲求が、反社会的な仲間に入らないための「ストッパー」になった。

出院者インタビューを終えて

フリージャーナリスト　有馬知子

「新公益連盟が、少年院出院者のインタビュアーを探している」と、ビジネスインサイダーの浜田敬子統括編集長からお話を頂いたのが、2019年10月ごろだったと記憶しています。

ひきこもりや依存症、児童虐待などを取材する中で、出院者・出所者が「地続き」のテーマではないか、という思いは、それまでも何となくありました。取材のきっかけを探していた私にとって、渡りに船のお話でした。

インタビューした10人の出院者には、虐待やいじめを受けた人、児童養護施設やシングルマザー家庭で育った人もいました。しかし誰もが過酷な体験に心を塗りつぶされることなく、社会の中で、自分自身の人生を歩もうとしていました。

報告書完成を機に開かれたイベントで、私は「再犯しないためには、どんなつながりが必要か」と問われ「1本の太い糸より、100本の細い糸」ではないかと答えました。もちろん家族の存在は大きいですが、尊敬してくれる後輩、数カ月に一度会うだけの支援者を緩やかな「錨」として、社会に留まっている人もいたからです。100本の細い糸のうちの1本になると思えば、周囲の人が出院者と関わるハードルも、低くなるのではないでしょうか。

同時に、新たな疑問も浮かんでいます。

インタビュイーはおしなべてコミュニケーション能力が高く、読書や資格取得に取り組む意思と知性を備えていました。彼ら自身からも「エリートヤンキー」「ヤンチャ系」という言葉が聞かれました。

しかし法務省矯正局の小山定明さんは前述したイベントで、最近はコミュニケーションや集団行動が苦手な入院者が増えていると指摘しています。

10人が更生できたのは、入院者の「上澄み」だったからなのか。そうでない少年たちはどこに行ってしまったのか。今後も機会をとらえて、取材を続けたいと考えています。

最後に、少年犯罪や少年院の知識に乏しい私を導いて下さった、ＮＰＯ法人なんとかなるの吉田雄人さん、ＮＰＯ法人育て上げネットの工藤啓さん、そのほか、インタビューを支えて下さった新公連の皆様に、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

そして何より、貴重な経験を明かして下さった10人の出院者の皆さん、本当にありがとうございました。

有馬知子
フリージャーナリスト。早大卒業後、共同通信社に入社。経済部、生活報道部などを経て2018年独立。ビジネスインサイダー、日経デュアル、弁護士ドットコムニュースなどに記事を執筆している。主な取材テーマは労働問題、ひきこもり、児童虐待、依存症など。
連絡先：arimat2001nakaji@gmail.com

	新井博文さん	相川知美さん（仮名）	深澤日向さん	高木直人さん	杉田良彦さん（仮名）
不良行為を始めた理由	いじめと両親の離婚で行き場を失う中、「同じような子の吹き溜まり」である不良仲間に居心地の良さを感じた。	姉に暴力団関係者に引き合わされ、組事務所に出入りするうちに薬物中毒に。遊ぶのが楽しくて渋谷のチーマーらと付き合うようになる。	打ち込めるものがなく、小学校高学年から悪さをするように。兄の友人に誘われて暴走族へ。親も元暴走族で、怒られても「お前もやっていたくせに」と思うだけだった。	親の離婚や義母の虐待などで居場所を失ったこと。特に18歳で「野良」生活を送るようになってからは、パチンコ屋やゲームセンターで過ごす金を得るため、万引きを繰り返した。	打ち込んでいた部活動をやめたこと。遊びの楽しさに負けて、喫煙や窃盗などの違法行為をエスカレートさせた。
入院中の生活や、役立った支援	大型建機や危険物取扱の資格を取得したが未活用。農作業を通じて働く喜びを知った。読書習慣を身につけたことが、のちにピースボートを知る「種」になった。	一定期間外界と遮断され、自分の行為の異常さを認識する時間ができたこと。教官の指導で役立ったことは「正直、何もない」	水府学園で、熱心に相談に乗ってくれた教官を今も慕っている。東北少年院での資格取得を通じて、勉強することの喜びを知った。ただ取った資格は未活用。「悪い友達から離れればいい」といった教官の正論も心に響かなかった。	本気で向き合ってくれた教官との対話を通じて、生活を立て直そうと思うように。「育て上げネット」を紹介され、出院後も継続的なサポートを受けられた。	担当教官との出会い。被害者の気持ちを想像するロールレタリングなどを勧めてくれたほか、「社長になりたい」という夢を、現在の職業に結びつけるアドバイスもしてくれた。その後の人生における相談相手でもある。
出院後の生活、困りごとなど	再犯を恐れて地元を離れようとしたが、中卒の求人がなかった。	警察に関わるたびに、前歴を照会され薬物使用を疑われた。	更生保護施設の制約の多さ。住み込みの職場では、失職と同時に住まいを失うリスクにさらされた。今も酔うと歯止めが効かず、暴力を振るおうとしてしまう。	身分証明書がなく、最初は携帯電話も契約できなかった。住み込みの職を得たが、体を壊すなどして働けなくなり、住まいと職を一度に失った。職場に親しい人が周囲におらず、孤独のため仕事に踏みとどまれなかった。	専門学校入学を目指し、1年間現場労働で学費を貯め奨学金も得るなど苦労を重ねた。在学中も夜はアルバイトをして学費を稼いでいたため肉体的負担は大きかった。
必要だと思う支援	将来何をやりたいのか、本人に寄り添い考える支援が必要。資格取得の際も、本人の希望を踏まえて必要な資格を選ぶべき。出院後は、住み込みの職という1本の太い糸だけでなく、数多くの細いつながりを持つための支援が必要。	自分を信じ、困った時に助けてくれる人の存在。血縁のない第三者でも構わない。出院者が堂々と再会する場を作り、頑張る姿を見せ合うことも必要ではないか。	闇雲に「更生」を目指すのではなく、ほどほどに遊ぶことも受け入れながら自活させる支援。	出所後、定期的に会って話をする伴走支援。困りごとを相談した時に、支援の選択肢を示してもらいたい。	やりたい事を探し、将来の進路をある程度明確にする支援と、出院後に相談に応じるメンター。悪い友人に誘われた時の逃げ方など、再犯防止の具体的な対処法を入所中に教えておくこと。
再犯の歯止め	暴走族仲間の死に接して「罪を犯さず一生懸命生きよう」と思ったこと。ピースボートの仲間や家族など、複数の居場所を得て「愛情」を感じ続けられたこと。	自分のしたことを、両親や家庭環境のせいにしなかったことと、子どもの存在。	NPO法人クラージュの新しい仲間。彼らと楽しくすごしたい、少年院の生活はもう嫌だという思い。	相談相手になってくれる育て上げネットの職員や友人との人間関係。何よりも住まいを確保し「犯罪行為をしないと寝るところもない」状態から脱したこと。	苦労して進学した自分の頑張りや、取得した資格が「再犯したら水の泡になってしまう」という思い。

	望月優矢さん	中島将毅さん	鈴木玲士さん	浜田雅也さん（仮名）	鈴木将吾さん
不良行為を始めた理由	小学校の頃から暴力を振るうようになる。周りも犯罪を止めるどころか、加担するよう誘うような環境で、犯罪行為に抵抗がなかった。最終的には「一生犯罪者として生きていくのだ」と思うように。	暴走族の勧誘を断っているうちにトラブルになり返り討ちにして入院。出院後は「大人への反感」を共有できる居心地の良さから不良仲間とつるみ、ケンカを繰り返した。	母子家庭で母親は働きづめのため、子どもに目が行き届かなかった。周囲にも悪い友人が多く、中学の頃から暴走行為や万引きを繰り返すように。	最初は遊びのつもりだったが、遊ぶ金を稼ぐため薬物売買などを始め、犯罪行為がエスカレート。最終的にオレオレ詐欺のリーダーを務めるようになった。	小学校から成績優秀な半面、万引きやケンカもする「エリートヤンキー」だった。成績に対してプレッシャーを感じていた分、いったん道を逸れると反動で悪い方へエスカレートした。ぐれ始めた3つ上の兄を、カッコいいと感じたことも大きな理由。
入院中の生活や、役立った支援	資格取得によって成功体験が積み上がり、やればできると思えるようになった。読書習慣も身につけた。一方、喜連川少年院の私語厳禁、笑うことも禁じられるといったルールなどには疑問を感じている。	少年院での生活は、教官への不信感を募らせただけで役立ったことはあまりない。19歳からの禁固刑で、ひたすら人を死なせてしまった事実と向き合い、懺悔を繰り返した。	信頼できる教官と出会えた。認知療法のワークを通じて、感情のコントロールや課題解決の方法を学べた。人に頼ることの大切さも学び、読書習慣も身に付いた。一方、行動訓練は苦痛だった。	被害者への手紙やロールプレイを通じて、罪の大きさに気付いた。読書するようになって起業を志し、簿記と英検を取得。必死に勉強した経験が自信になった。入所していた大卒者から励まされたことで大学進学を志すように。	資格取得の勉強を通じて知識が身に付く喜びを味わい、読書習慣も身に付いた。反省文を書くことで、被害者への罪悪感も生まれた。一方、私語厳禁のルールは、コミュニケーション能力を低下させると感じた。
出院後の生活、困りごとなど	地元を離れて就職したが、孤独感から結局昔の友人とアクセスしてしまい、再犯を繰り返した。	当初は人混みでトラブルに遭遇し、同じことを繰り返すのが怖かった。未成年だったので実名を報道されず、出所後は実家に勤務したため、生活や就職で困ったことはない。	お金を貯めるためキャバクラに勤めている今の境遇に、不満を覚えて自暴自棄になることがある。深夜に及ぶ重労働で、NPO設立という目標に向けた準備がなかなか進まない。	高卒の学歴でスキルも職務経験もないため、面接で何十社も落とされた。	「学歴がぐちゃぐちゃ」で、人生の選択肢が狭まった。入院経験を伏せたままだと話に齟齬が生じ、深い友人関係を築きづらい。友人に入院経験を明かしたら、多くの人に広まり白い目で見られたことも。地元でも「あいつに関わるとやばい」と避けられた。
必要だと思う支援	「やりたい事」を一緒に探し、見つかったら具体的に行動に移すための後押しをする支援。（サッカーが好きな子には、クラブチームを紹介するなど）	正論で子どもを押さえつけるのではなく、話に耳を傾け、子ども自身の好きなものを探す支援。	入院中に、漠然とでもいいので、やりたい事を見つけるための支援	人間関係という「錨」。困った時に相談に乗ってくれて「あの人と約束したから頑張ろう」と思える相手。	昔の仲間に誘われないよう、新しい職場と人間関係という環境を提供すること。
再犯の歯止め	触法少年の自立を支援するNPO法人「クラージュ」の仲間たちと一緒に過ごしたいと言う思い。海外旅行で自分の「小ささ」を思い知った経験や、30代で海外移住したいという夢。	事故死した婚約者に対して恥ずかしくないように生きなければという思い。妻子ができて、悲しむ人の数が多くなったこと。	「出所者支援のNPO立ち上げ」という目標。ささいな事柄からでも、自由に暮らせる幸せを感じられるようになったこと。ストレスを感じたら、筋トレや飲み会で発散。	「入所中、必死に勉強した努力を無駄にしたくない」という思い。相談に乗っている後輩たちのロールモデルとして、身を律するようにしていること。変わりたいという強い「意志」「生活拠点」「付き合う人間」が重要。	「海外でビジネスマンとして頑張りたい」という目標と「広いまともな世界で認められたい」という承認欲求が、反社会的な仲間に入らないための「ストッパー」になった。

本報告書に関する連絡先

新公益連盟 少年院分科会

吉田雄人（NPO法人なんとかなる 共同代表）
yyoshida@nan-toka-naru.net

工藤啓（認定NPO法人育て上げネット 理事長 工藤啓）
kudo@sodateage.net